

## 阿部信行述『政治外交と軍部』の紹介

柴 田 紳 一

(国学院大学日本文化研究所兼任講師)

### 解 題

国学院大学図書館が所蔵する昭和史関係史料の一つに「内外法政研究会研究資料」(計二十点、請求番号210、087 3)がある。本史料は、いわゆる東京裁判において被告島田繁太郎海軍大臣の弁護人を務めた瀧川政次郎国学院大学名誉教授が、昭和三十七年に国学院大学図書館に寄贈した東京裁判関係資料の一部で、同年以来、他の弁護側各種文書・関係新聞記事切帳等と共に公開されているものである。

阿部信行述『政治外交と軍部』は、その「内外法政研究会研究資料」の第一二〇号として作成されたもので、要職を歴任した陸軍出身の政治家阿部が、戦後自らの公的生涯の一端について回顧した長文の記録である(謄写版、全九十四頁)。

「内外法政研究会」について、住本利男著『占領秘録』(昭和四十年刊、三二〇―一頁)に次のような記述がある。「日本政府は、戦犯裁判については、すこしも積極的な動きかたをしなかった。戦犯問題にふれるのを極度におそれた。連合国側のほう大な組織にたいして、戦犯容疑者たちは、個人々々が裸で対抗しなければならぬような形勢だった。これでは全く連合国のひとり相撲になってしまう、組織には、ある程度の組織で対抗するほかはない、という気持が容疑者の関係者たちに出てきた。中村「豊一」公使も外務省首脳部に、この点をうったえて、政府が何かしら協力しなければならぬ、と説いてきたが、動きそうもなかった。そこで公使は、岸本勘太郎氏と話をし、これに福島正雄、加藤正雄氏らが加って、裁判準備を組織的にやることになった。

岸本氏らが中心で、財界から資金をあつめて、『内外法政研究会』という団体をつくった。名前は漠然としているが、戦犯裁判の弁論に必要な資料を、日本側としてあつめる機関だった。書記長は鶴飼信成氏となり、委員には高柳賢三、高木八尺、小野清一郎、信夫淳平、金森徳次郎、河合良成、堀内謙介氏ら十五名ぐらいたった。右翼の動き、軍の動向といったように、戦争に至るまでの政治や経済の情勢について、いろいろな人を招いて話をきき、これをプリントにした。「二十一年の」夏ごろまで仕事はつづけられ、調査資料は大きなものにまとまっていた。そして求められれば、容疑者やその弁護人に提供したのである。」

ここにいうプリントの一つが阿部信行述『政治外交と軍部』である。陸軍大将の阿部は、昭和十四年八月から十五年一月にかけて内閣総理大臣に就任しているが、従来、戦前・戦中期を通じて歴代首相のうち、伝記類（日記・回顧録や側近の記録を含め）をもたない唯一の総理のように見られていた。管見のかぎり、阿部ないしは阿部内閣に関する研究、阿部に若干でも関説した諸研究の中で、阿部の自伝ともいえるべき『政治外交と軍部』に言及したものはない（阿部の旧蔵文書約一五〇点は、東京大学法学部近代日本法政史料センターで昭和四十八年以来「阿部信行関係文書」として公開されているが、『政治外交と軍部』は含まれていない）。そもそも「内外法政研究会研究資料」自体をある程度まとめた形で所蔵・公開しているのは、国学院大学図書館と、東京大学法学部近代日本法政史料センターのみのようであるが、同センター所蔵の「内外法政研究会研究資料」（計二十二点）の中に『政治外交と軍部』は含まれていない（参照、『国家学会雑誌』九十一巻第一・二号、一三八―九頁）。昭和史研究に裨益するものと考え、ここに阿部信行述『政治外交と軍部』の全文を紹介する次第である。

本史料の内容に関連して、阿部の略歴を記しておきたい。明治九年元金沢藩士阿部信満の長男に生まれ、第四高等学校中退、明治二十九年陸軍士官学校入校、大正十年陸軍大学校幹事、十二年参謀本部総務部長、十五年陸軍省軍務局長、昭和三年陸軍次官、五年第四師団長、七年台湾軍司令官、八年軍事参議官、十一年予備役編入、十四年内閣総理大臣、十五年駐中華民國特命全權大使、十七年貴族院議員・翼賛政治会総裁、十九年朝鮮総督、二十八年死去。なお、阿部の陸軍士官学校同期に、荒木貞夫・真崎甚三郎・本庄繁・松井石根がいる。また最後の内大臣木戸幸一と阿部とは親戚関係にある（昭和十四年、阿部の長男と木戸の長女が結婚している）。

〔付記〕翻刻に際しては、適宜（ママ）を附し一部旧漢字を現行のものに改めた以外、仮名遣い・句読点・ルビ・改行は全て原文のままである。

(表紙)

「極秘

」[鉛筆書]「阿部大将」

研究資料第一二〇号

## 政治外交と軍部

### 目次

#### 第一 満洲事変前後の軍の情勢

- 1、陸軍々団制案と八八艦隊編成案
- 2、関東大震災と軍備縮少
- 3、満支要人の毎日の態度と満洲事変
- 4、誤伝された田中義一大将の大陸政策と張作霖爆死事件
- 5、建川中将、鎮撫のために訪満
- 6、阿部信行、軍の独善主義を戒む
- 7、支那事変発展の原因
- 8、二・二六事件発生 of 素因と其の影響  
(軍の長宛連袂辞職と阿部大将)
- 9、引退後の阿部大将

#### 第二 阿部内閣の成立及其の政策

- 1、阿部大将の軍政に關係した動機
- 2、組閣の大命を拝受した当時の心情と大命降下の理由

内外法政研究会  
」

3、欧洲戦争不介入の理由

4、阿部内閣と汪精衛による南京政府樹立計画及全面和平問題

5、阿部内閣の対欧米政策と桂冠の動機

6、軍部内に於ける阿部の立場

7、連絡なき軍と政府及連絡会議

8、阿部内閣桂冠に対する陸海軍の態度

### 第三 日華基本条約の締結

1、駐華全權大使決定の経緯

2、南京政府の性格及交渉の概要

3、其の後の南京政府

### 第四 重臣会議と戦時内閣

1、重臣会議開催の動機

2、第二次近衛内閣と阿部大将

3、重臣は全然、国際情報を与へられなかった

4、東條を誰が首相に推輓したか

— 宮様推戴説 —

5、東條決定の重臣会議の真相

6、東條は対米政策の再検討を行ふ

7、小磯内閣奏薦の重臣会議の真相

### 第五 翼賛政治会と阿部総裁

1、総選挙実施前後の実情と「翼賛政治協議会」設立の動機

2、阿部大将と東條大将の関係

3、推薦選挙を決定した理由

- 4、翼賛政治会創立の理由と阿部総裁就任の経緯
- 5、翼賛議会の使命

- 6、何故東條内閣を支持したか及阿部翼政総裁辞任の理由

- 7、政府、翼政、翼賛の三位一体

#### 第六 東條内閣と重臣会

- 1、東條内閣時代の重臣との連絡会議

- 2、東條内閣瓦解の動火線となつた重臣の会合

#### 第七 朝鮮総督時代の阿部総督

- 1、小磯首相新任と同時に朝鮮総督就任を要請

- 2、朝鮮統治の基本方針

- 3、終戦後の処置と京城の实情

- 4、政府の総督府に対する態度

- 5、降伏文書調印式と総督

### 第一、 満洲事変前後の軍の情勢

#### 1、陸軍々団制案と八八艦隊編成案

満洲事変前の日本の財政状態は、逐次悪化し、歴代内閣はいづれも予算の節約に努力してゐた。殊に民政党内閣になると公債は絶対に募らないし、予算は減茶苦茶に切詰めたのである。随てまた軍事費の予算も減茶々に切詰めるといふのが政策みたいになつて居た。然るに軍の方から言はしむれば、日露戦争の後を承けて、下手をまごつくとソ連は復讐戦をやるかも知れないといふ状況にあるし、又太平洋方面全体からいつても日本が何となく孤立の状態になるといふ風な時であつた。日本がソ連の復讐戦に備へるといふことになる、日露戦争当時を持つて居つたやうな兵力ではとても足りない、何とかそれに矢張り近代戦的の

編制も持たねばならぬといふことを痛切に感じてゐたのである。その結果大正六年に陸軍の編制をすっかり変へようといふ案を立てたのである。つまり師団の編制を軍団の編制にして、若し大陸戦でも起つたならばその時に動くに都合の好いやうにしようとしたわけである。然し、これについては相当の軍事費が要る。それで大正六年の案に基いて大正九年頃迄に漸く予算案が臨時議会に出たのである。ところが一方に於て海軍はどうしても八八艦隊を必要とする。それで海軍は八八艦隊の案を立て、陸軍は軍団編制の案を立てた。そこでいろ／＼折衝の結果、案は出来たが、併し海軍の八八艦隊は必要だから、陸軍は案を立てたその予算をずつと先に延ばさう、大正十六年迄は海軍をやり、それから後に陸軍の案をやつて行かうといふことになり、それを議会も認めた。

## 2、関東大震災と軍備縮少

然るに大正十年のワシントン会議で海軍は造りかけて居つたその軍備を縮小せねばならぬことになった。併し陸軍の方は、海軍の予算を減らすからそれを直ちに踏襲するまでに至らないうちに関東大震災になつた。関東大震災に遭遇した為に日本の財政状態はすっかり變つて来た。陸軍も勿論海軍が八八艦隊をやつて居る時に少しづつは物を殖して居る所はあつたが、未だ大きな編制替までは至らなかつた。そこで陸軍の方でも、現在貰つて居る年度割の予算さへも大震災の為に出すことは出来なくなつた。これぢやアならぬといふ状況であつた。併しながら、例へば飛行機とか戦車といふものは将来戦にどうしても必要なものだ、だから少しでも拵へたいといふので、予算は取れない、寧ろ削減されるといふ状態の下に於て新式の戦車や飛行機を少しでも拵へよう、已むなくんば師団の数を減らしてもさういふものを拵へようぢやないかといふことを参謀本部の発意で言ひ出した。陸軍省がそれに応じて、そこで参謀本部、總監部、陸軍省から委員を出し、差当り要るものを拵へるといふ為の編制はどうしたらよいかといふ事の研究会を拵へた。その研究の結果四箇師団を減らさうといふことになった。

併し四箇師団を減らしても僅に千六百万円しか節減出来ない。その千六百万円を以てやるのだから、飛行機を拵へる、戦車を拵へる、高射砲隊を拵へるといつても知れたものである、何中隊しか出来ない。併しどうしてもそれを拵へなければならぬ。ところが軍事参議官の会議などでは古い人は「師団を減らすとは何事だツ」といふので、当時の陸軍大臣たる宇垣さんなどが非常に悪口を言はれたものである。又軍の若い者達も悲壯の感じを持つて居つた。併しながら師団は減らされたが一文も国庫の方へは移されない、全部飛行機、戦車、高射砲隊を拵へる方へ廻された。さういふ経緯を踏んで四箇師団が減つた。大正六年には師団をもつと殖したいといふ考で居つたのを減らしたといふので、当時関係者は非常な悲壯な感じであつた。それも一つに財政関

係から来て居る。そして大正十七年から陸軍が新たな予算で何かやらうと言つて居つたのもずっと先に繰越されてしまつて貧弱な予算を取つて居つた。

斯様な経緯を辿つて昭和の初めになり民政党内閣になつた時分には、事実国庫の収入は減るばかりである、酒の税とか何とか皆減る。そこで予算は出来たけれども、到底予算の通りには実行出来ないといふので実行予算を拵へてうんと減らした。官吏の俸給も減らした。甚しきは軍の兵隊に食べさす糧食にまで手を着けようとした時代がある。

斯かる状況に直面して居つて軍の作戦準備はどうかと言ふと、さういふ風にどんぐり減らされて行つてこれで我々はよいのか、これで我々はサアといふ時に任務が務まるのかといふのが陸軍上下一般の考になつて居つた。そこで若い者は憤慨するといふことになつた。

### 3、満支要人の毎日的態度と満洲事変

ところが一面に於て、日本内地がさういふやうな状態になつて居る時は、又外地に於ても日本がどんぐり侮られる因<sup>もと</sup>になつて居つたのである。日露戦争直後、少くも満洲に於ける要人、北支に於ける要人は日本に親善関係であつたのが、次第々々にあれこれとそりが合はぬ事が出来て来る。これは境を接し同じ処で仕事をするとなれば、一挙手一投足に何かと氣まづいことが出来るのは当然で、こちらはこちらで、いや張作霖が生意氣だと言ひ、向ふは向ふでさう日本の思ふやうには言ふことをきかないといふ事態が湧いて来た。

日本自身としては、将来は何といつても満洲が日本に対して共存共栄の立場を確立して貰ひたいと考へて居るけれども、向ふは共存共栄の立場をだんぐり示さなくなつて来たといふ結果が遂に満洲事変になつたものであると思ふ。であるから若し、日露戦争が起つた当時の日本の満洲に対する考を支那が十分理解して、小異を捨てて大同につくといふ立場をやり得たならば、満洲事変といふやうな不幸な事件は恐らく起らなかつたと思ふ。

先日米軍の将校に私は話したのであるが、満洲事変も支那事変も日露戦争に出発して居るのだ、満洲事変の数年前には張作霖事件があつたのだが、この張作霖事件が張学良をして日本に対していろ／＼悪い感じを持たせるやうになつたと思ふ。然らば張作霖事件は日本政府の意図するところであつたかどうかといふことは、これは大変大事なことであると思ふ。

### 4、誤伝された田中義一大将の大陸政策及び張作霖爆死事件

世間には、田中大将は大陸に対して野心を持つて居つて随分無理押しをするやうに計画して居つた人だと誤解して居る人が多

いけれども、併しあの人程気がやさしく支那に対して居つた人は或は無いかと思はれる。(イ) 蒋介石が下野して日本に来て更に米国に行かうといふのが、田中さんに会つた結果彼は舞戻つて再び朝に立つたのである。(ロ) 又、張作霖に対しては彼がだん／＼北支に出て行つて大統領にでもならうといふ風に、満洲を基礎にしないで中原に駒を乗出すといふことについては田中さんは非常に心配して居つた。それは、「さうなると、結局、張作霖の立場を無くし、更に戦禍が満洲に及ぶ、満洲には今まで中央の不安は及ばなかつた、あの安居樂土は何処までも残して置きたい、それには張作霖が野心を持つて中央に出て行くことは宜くない、だから何処までも満洲に君臨させて置きたい」といふのが田中さんの希望であつた。そこで昭和二年六月廿七日田中内閣は対支政策に就て東方會議を開いたが此の會議は世上に宣伝せらるゝ程の事はなく、田中首相兼外相の意見は頗る穩險<sup>ベンケン</sup>妥当なるものであつた。即ち、田中首相兼外相の考へは、曩にも述べた如く支那本土の支配に就ては蒋介石に、満洲の支配に就ては張作霖に委せ、支那を兩分して統一ある政治を行はせようといふのであつたから、田中首相兼外相の肚では蒋介石にしても、張作霖にしても年来の諒解があつたので充分に其の目的を達し得ると確信して居つたものである。そこで張作霖が北京に乗込んで大元帥に就任し、全支に号令せんと試むるや、日本側では其の非なることを指摘し、速に關外に引揚げ、蒋介石との衝突を避けしめようとして、張作霖に対し極力其旨勧告したのである。所が当時張作霖の態度は反目的で事毎に我方に突掛つて来る傾向があつたので、我が軍部に於ては大いに憤慨し其後張作霖の下野を要求する声漸く高くなつて来、陸軍側では田中總理に向つて張作霖の帰滿を拒否し且つ下野を断行せしむべしと主張したものであるが、田中首相兼外相は前述のやうな考へから断乎として之を却けば、張作霖をして飽く迄も満洲に於て其の地歩を保たしむべしといふ意見を取つて動かなかつた。そこで或時外務省から有田君、陸軍から私の二人が伊豆修禪寺に静養中の田中首相を訪問して「總理の考方は甚だ妥当でない。若し張作霖が今の儘で蒋介石軍と戦つて、敗れた乱軍になつて満洲に逃げ帰るやうなことになる」と満洲の治安は全く保ち得なくなる。それでは大変だから今の中に張作霖を下野せしむる方がよい。然らずんば張が斯<sup>マヤ</sup>満<sup>マン</sup>せんとしても我が軍は断じて遼河以西に入ることを許し得ない」と談じ込んだが、田中首相は「大丈夫だ、断じて満洲のことは心配ない、俺が保証する」といふので、我々二人は「首相が如何に保証されてもそれは總理の力で實現を如何ともし難い」と反対した。然し田中は却々頑強に自説を固執して譲らず、結局、白川陸相から閣議に持出したが、總理は張作霖を満洲に帰還せしむることを強調し張作霖下野に反対してきかず、遂に白川陸相も已むなく總理の説を入れることとなり、田中兼摂外相より張作霖の帰滿方勧告に就て北京駐紮芳沢公使に訓令を發し、漸く張作霖の承諾をとり附け右様の次第で我が陸軍側では出先の村岡関東軍司令官、斎藤參謀長に対し中央の廟議決定の事情を傳達し、善処方を



訓令したのである。従つて田中首相は勿論、白川陸相以下軍部中枢部に於ては張作霖帰満の方針を以て帰満後の対策に関し種々考慮して居つたのである。然るに張作霖が帰満の途中、突如爆死事件が持上つたので我が中央部に於ては愕然としたのである。殊に田中首相の落胆は非常なものであつた。日本軍人及び浪人共が此の事件に関係してゐよう等とは思ひも寄らぬ事なので、これからの満洲は容易ならぬ形勢になるだらうと憂慮してゐたものである。所が幾許なくして張作霖爆死事件に日本軍人が関係してゐるといふ風説が流布せられ、小川平吉君から此の風説を田中首相に内報し、「若しそんな事があると大変だ」と注意した。一方当時の反対党たる民政党では時こそ来れとて囂々たる非難を浴びせかけたのである。そこで田中総理は白川陸相に事実の取調方を命じ、白川陸相は、峯憲兵司令官に其の真相調査を命じ、峯司令官自ら渡満する事となつたのである。当時我々は日本軍人の内にそんな不屈な奴はなからうと信じてゐる。此の事件に参加した者があるといふ事を聞かされたが豈計らんや峯司令官は朝鮮に至り、早くも我が陸軍々人が、此の事件に関係しある事実を知悉したので、其旨報告し次で其の真相を通報して来たので、我が陸軍中央に於て尠ならず驚き、白川陸相から田中総理に其の旨詳報したのである。そこで田中首相は十二月二十八日の御用仕舞の日に参内、陛下に拝謁して委曲奏上すると共に、犯人に就いては軍法に照らし嚴重処分する積りであると内奏したのである。

斯くて、田中総理は白川陸相に右内奏を伝達すると共に、同犯人に対する処置方を命じたのである。所が当時軍内部の意見としては苟くも他国の元首の地位にある者を我が陸軍の軍人が爆薬を以て暗殺するといふやうなことが判明すれば国内的に影響する所が甚大だ。従つてかゝる問題は公表せずして国内的に行政処分で秘密裡に処置してしまふ方がよい。これを田中首相の言ふやうに軍法會議に附するやうなことをすると兎も角一応は公表せなければならぬ。そうすると事件は表面に現はれる。それでは困るといふのである。田中首相が軍法會議に附し嚴重に処分すべしと強調し、閣僚中二三の者も之に同意したのであるが、軍部首脳部の意見は全部反対で、国家に不利益になることは国内的又軍事的に多少の欠点はあつても表面化する訳にはゆかぬといふので極力反対した。田中首相は既に陛下に「軍法に照らし嚴重処分致します」と内奏申上げてゐる関係上どうしても陸軍側の主張を容認しない。斯くて田中首相と軍部側との間に厄介な問題を引起したが、結局軍部側の意見が大勢を制し、田中首相は已むなく自説を翻へし再度陛下に拝謁して「張作霖爆死事件に陸軍々人（主犯河本大作大佐）が関係してゐることが判明した事情を申上げ、此等軍人に対し行政処分を行ふ」旨を奏上した処、陛下から「それでは首相が曩に言明した処と相違するではないか」といふ御不満の意を御洩らしになつたので、田中首相は大いに恐懼し、退下の後政治的責任と御信任に背くを理由として辞表を

捧呈したのである。而して田中首相は白川陸相を呼んで「自分は政治的責任と陛下に対する御信任に背く処より辞表を捧呈したが、然し軍部大臣として君は行政処分に附した経緯を委曲奏上して陛下の御允許を乞ひ奉れ」と申渡し茲に田中内閣は瓦解したのである。要之田中首相は飽く迄も犯人を軍法會議に附して嚴重処分を要請したのであるが、軍部側の国際関係より観てさうする事は国家に不利益だといふ見解から之れに反対して行政処分に附したものである。此点は今日より見て「田中首相の主張の方が正しかった」と云ふ者と、之に対し「軍部側が飽く迄も大義親を滅すと云ふ大乗的見地より国際的に国家の不利益を招来するやうな事はあく迄も避けて行くのが真の武士だ」と云ふ説と両論あるわけだが、兎も角当時田中首相の心裡は公明正大なもので、世上に宣伝せらるゝやうなものではない。当張作霖爆死事件犯人に対する行政処分は村岡閔東軍司令官以下斎藤参謀長（当時既に東京湾要塞司令官に転じてゐた）以下関係首脳部は全部予備役又は左遷され、当の主犯河本大佐は待命を命ぜられたのであるが、其後河本大佐を現役復職の上予備役被仰付るに對しては本来から言へば将官に非ざるを以て陛下に上奏すべきものではないが事件が事件である關係上侍従武官長を通じ御允可あるや否や御内意を相伺ひたる上、改めて私が参内拝謁の上河本大佐の復職を奉願したる処陛下には「将来陸軍々人は斯る過ちを再び為ざるやうに」といふ条件付の御言葉を賜り漸く御許しを得た次第で、當時に於ける軍の態度は誠に嚴肅なものであつたのである。

然るに其後、陸軍々規は漸次乱れ、陛下よりの「再び斯る過ちをせざる様に」といふ御言葉を奉ぜず三月事件、十月事件を経て、二・二六事件を繰り返へすに至つたので當時陸軍長老の任職にありたる我々としては恐懼の至りに堪えず二・二六事件直後遂に其責任上全大將が退役を願ひ奉つた次第で此の事情は今日迄軍部の絶対秘密となつてゐた所である。

叙上の如く當時政府当路者は満洲に於て妙な事を起さうとか満洲の当路者を叩かうとかいふやうな考は毛頭無かつた。ただ張作霖の爆死事件の後満洲に於ける要人の日本に對する考へ方が著しく他に転回してしまひ、又張作霖が亡くなつてしまつたと同時に南方の国民政府の勢力がぐんぐん奉天に入つて来てそれと一致したやうな態度に於て日本に楯突くやうになつた。その結果が段々と發展し遂に昭和六年九月十八日の柳条溝事件となつて現れた。日本としては耐へに耐へて居つたところがあゝいふやうな事件として爆発したのでそこでこの際斯ういふやうな考へ方で行つたのでは満洲はどうなるか分らぬといふので、満洲の当路者を膺懲するといふことになりその後の兵力使用になつたものと私は觀て居るのである。

##### 5、建川中将、鎮撫のために訪満

柳条溝事件の直接の動火線に関する詳細は分らない。併し當時の満洲側の空氣が非常に不穩になつて居つたことは事實である。

ために建川が鎮撫に行つた位である。十月十八日に鈴木莊六大将が在郷軍人会長として満洲に行つたが帰途大阪駅で「満洲で事が起つた、厄介な事だナ」と述懐してゐたやうな状況であつた。その時の話では、「建川は鎮撫に行つた。ところが鎮撫に行つて着いたか着かぬかのうちに起つた」といふことである。世間ではあれは計画してやつたといふ風に云はれて居るけれども、少くとも建川の任務が鎮撫であつたと信じられて居る。

#### 6、阿部信行、軍の独善主義を戒む

其の頃、大阪に第四師団長をしてゐた阿部信行は、「これは厄介な事になつたけれども、起つた以上は速かに之を片附けることが必要なのと、この満洲事変の起つたことについては国内に於て総ての人が十分な理解を持たなければならぬ。ただ軍だけの考へ方でよいのだといふ風に思つて居つてはいかぬ。」といふ見解を抱き、之に対して非常な憂慮を抱いてゐたが、たまたま彼は台湾へ転任させられた。台湾へ行つたのは一月であるが、然し彼は転任の直前、彼は大阪の部下の各隊を一つ／＼廻つて

「各隊の人々が各々軍務を万全に尽すといふこと一々斯ういふことをいつて歩いた。については今改めて要求する必要はないのだ。併しながら今や日本は満洲事変といふ特異の状態に当面して居る。その為に目下軍隊が動かされて居る。この点については皆篤と考へて貰はなければならぬ。今は彼処に大きな火事が起つて、消防夫たる軍人がその火事を消すことに非常な努力をして居る。そしてこの行動に対しては到る処の者が拍手喝采をして居る。併しながらこゝを考へなければならぬのは、この拍手喝采をして居るのは火事場へ来て火消しの仕事を見て居る弥次馬だけなんで、この弥次馬の拍手喝采を見てこれが総てであると思つて居ると間違ふ。遙か遠くに揚つてゐる火の手を見ながら炬燵にあたつて本を読んでゐる人達がある、この本を読んでゐる人達は火事場で如何なる働きがあるか、火事の原因が何であつたか、損害がどうであるか、そんなことは知らぬ顔でハ、アと見て居る、さて火事が終ると、この炬燵にあたつて居つた人達が出て来て火事の原因が何であつたか、火事で損害が出ただらう、こんな所まで壊すのは怪しからぬ、消し方が悪いと言つていろ／＼文句を言ふ、そこで我々は一面に於ては火を消さなければならぬが、他方に於てはこの炬燵にあたつてゐる人達を火事の最中に出て来て共に心配させる人達にしななければならぬ。私の最も心配するのはこれなんだ。この火事を消した跡を復た昔のやうな立派なものに直すやうにさせてやらなければならぬといふことを最後まで心配して貰つて、火消しが退いた後はそれ等の人達にやつて貰はなければならぬ。これが火消しに当る我々の任務だ。ただ戦さに勝たなければならぬ、万歳々々と言ふだけでなく、さういふ炬燵にあたつてゐる人達にも出て来て貰つて巧くやつて貰はなければならぬ、軍人だけが独り善がりでものをやつてはいかぬ。何もかも自分で出来る

ものだといふ風に思つてはいかぬ。ものにはそれ／＼の専門家がちゃんと居つて、こゝの始末はどうしなければならぬものだ、このやり方は善い悪いといふことをそれ／＼判断してやるのだから、満洲事変の始末をするのに軍人が俺だけがいふことではいかぬ。満洲事変といふものを国民全体がよく理解して国民全体が戦さをやるのだといふのでなければいかぬ。就ては残念乍ら私自身が諸君と共にやつて行くことが出来ないのは甚だ遺憾である。」と言つて居るうちに阿部は自ら感極まつて泣き出してしまつた。

八連隊の山下は阿部の話した後で、「師団長少しセンチ過ぎますナ」といふ始末であつた。阿部は之に対しても「いや、僕の言つた事が後になつて師団長あの時分にはセンチだつたナと笑ひ事になれば結構だが、併し師団長が斯ういふ事を言ひ居たが事実さうなつてしまつたといふことでは洵に困るから、この事は忘れないで居つて貰ひたい。」と重ねて注意をした。要するに阿部は満洲事変について斯うした考を持ち、「早く片附けて行かないとつまらない横槍が出る」と思つて居つたのである。然るに、事実上、果して出て来たのである。

#### 7、支那事変発展の原因

満洲に独立国を拵へる拵へぬといふ事については阿部信行は関せず焉であつた。だからあの独立国が出来た経緯については全く知らない。そして「あれが上海に飛火をしたのは甚だ遺憾だ」と思つて居た。「ただ叩いて押しつけければよいといふのではなく、叩くと同時に少し緩めて、そこにお互の間の諒解を発見することが何より必要なのである。ただ叩いていぢめつけるといふのではなく、戦ふのには戦はざるを得ない理由があるのであるから、一刻も早くお互の諒解点を発見して戦はなくてもよい所に到達しなければならぬ。」との見解を抱いてゐたのである。

阿部信行の観るところによれば、「上海事件」も政府が思ひ切りよく止めたからあの程度で済んだが、併しその結果は満洲国の独立といふ事が何時迄も引懸かつた。其の後満洲国を認めるか認めないかといふことは、結局北支を基地にしての反日であり、又満洲国打倒といふ運動が向ふに行はれ、その結果梅津・何応欽協定其の他／＼の協定を結ばなければならぬやうになつたのである。これも当時の行がかりからいつて自然であつて、満洲事変が起りあゝいふやうな形になつた以上はそれを盛り立てなければならぬ、盛り立てるには之を邪魔するものは取除けなければならぬといふことが本当であつたと思ふ。ただその間、一種の税関的に支那に言はすれば無理なやり方も起つたといふ事が沢山あつて支那事変が起つた。両方の感情の尖り方がそこにも原因をして居る。例へば関税を無視したやうな物の入り方があつたとか、或は日本が支那に航空路を得ようとして無理なやり方を

したとか。これも私は何応欽、呉鉄城氏に支那事変が始まる前に彼処に遊びに行つた時に話したのであるが、支那の方でももう少し大目に見て関税問題なども和やかに考へれば、それでも無理をして脱税的の行為をするといふことはないだらうと思ふけれども、機会均等といふが互惠条約的の関税さへもやらないといふのでは、川の流れを堰止めれば土堤が崩れて行くのと同じやうな流れが起る。又航空路も日本だけには許さないといふことになるが無理にもやつて行かうといふ考へ方も起るので、支那ももう少し日本を寛<sup>ゆる</sup>やかにすることが必要ぢやないかといふことを言つたこともあるのであるが、さういふやうな問題については支那が日本の行動に対して悪感を持ち、日本は又日本の立場として理由があるといふことが結局行詰つたところに支那事変といふものが起つたのであると思ふ。併しこれも両方が思ひ切つて譲れば左程のことは無しに行くだらうと思ふので、日本があゝの蘆溝橋事件といふやうな小さな事件で止めて、之を支那事変のやうな大きなものに拡大して日本の言ひ分を通さうといふやうなことを毛頭考へなかつたことは当時の近衛内閣声明でも分つて居る。

私はその当ても矢張りこれも大きくならぬやうにしなければならぬ、あんなことで大きな戦さになることは如何かと思つて居つたし、日本政府もさう思つて居つたから、七月七日の事件を十一日迄は宗哲<sup>そうてつ</sup>元と天津軍との間で何とか纏めようとした。そして、お互に顔を見合せて居れば小競合も起るから、一方は川の向ふ側へ引退り、こつちは出て行かないといふことにしようぢやないかと言つて居つたのだが、不幸にして十一日に向ふが言つて居る事と此方の考へて居る事との間に時間的の食違ひがあつて到頭兵力使用といふことが引続いて行はれるやうになつた。それでも心ある者は、これは大きな戦さにはならぬのだといふ風に考へて居つたけれども、併し相手方は又相手方の考へ方から行動をし、一面に於て北支に於ても戦闘が起り、やがては中支那に於ても大兵力を以ての上海攻撃といふ事が起り日本も已むを得ず彼方にも兵力を出さなければならぬといふことになつて大きな戦さになつた。併し何等かの機会があれば戦さは止<sup>や</sup>めたいといふのが日本の上下を通じての心持であつたと思ふ。ただ条件がうまく行かなかつたといふか、機運が熟さなかつたといふか、やればやる程思はしくない方向に進んで行つたといふのが事実であつたと思ふ。誰もが口を開けば支那事変の和平解決といふことを言つて居りながら尚且つ戦さを続けて行かなければならなかつたといふのを遺憾に思ふのである。支那事変の中途に於て我々がその局に立つた時にも、出来るならば支那事変は支那事変で纏めたいといふのが皆の考であつた。遺憾乍ら重慶方面がそれに乗らないので、已むを得ず他に心ある人があつて我々と一緒になつて支那を改造するといふ人があればそれに越したことはないだらうといふことであゝいふ事（汪精衛・南京政府樹立）になつたのである。これは第一次近衛内閣からの宿題になつてしまつて、それからそれへと承継がれていつて、私の内閣の時三代目の

内閣で初めてあゝいふ事になったので、誰も最初からそれを希望し又それを計画してやつた者は恐らく無いだらうと考へる。」

阿部は満洲事変の起つた翌々年台湾軍司令官を辞めて東京へ戻り、昭和八年から十一年の春迄軍事参議官をやつてゐたが、軍事参議官としての仕事は極めて閑散であつてこれはいふ目星しい事は何も無い、最初のうちは殆ど何処へも出ることはない、後になつてから一週間に一遍づつ陸軍省へ情報を聴きに出る、あとは軍事参議官としてやつたのは、操典とか、さういふものの改正には御下問があるから会議を開いてそれにお答へをするといふ程度であつた、戦さについては状況を聴くだけである。戦さについてどうしようあゝ、しようといふことは何も無いのが普通の参議官の状態である。軍事参議官は日露戦争直前から出来たものであるが、平常は何も仕事が無いのである。従つて、阿部の上叙の如き意図が其の後果してどの程度に遍く軍部へ浸透したかは疑はしい。

満洲事変当時は軍部の鼻息が荒かつた。越境事件といふ一事を觀ても以て其の氣魄を忍ぶに足らう。

いふまでもなく、満洲事変勃発直後あの儘事態を捨て、置けば由々しい結果になるおそれがあつた。我が関東軍の兵力が極めて少数であるから支那軍の兵隊が思ひ切つて強く出で来れば関東軍だけでは之に対処することが出来なかつた。そこで朝鮮に急を知らせたが、朝鮮軍は「責任は負ふが、日本が敗けては大変だから」といふので援兵だけは出さうといふ決意をし遂に所謂越境に及んだのである。あれは全く国内的のもので、越境して宜いか悪いかといふことは対支問題でもなければ対外問題でもない。本来、朝鮮軍は朝鮮を防衛する軍隊である。関東軍は満鉄沿線を防衛する軍隊である。各々その任務を与へられて居る。その朝鮮軍が越境して軍隊を出すことは素より許されないことになってゐたのである。日本内地に於ても東京の師団が名古屋の師団の管轄内へ飛込んで行くことはいかぬといふ位に嚴重なものなのである。それをあの時には「叱られてもよろしい、日本の友軍が敗けては大変だ」といふので行つたわけである。児玉友雄が参謀長で、林銑十郎大將が軍司令官であつた。越境の前に、嘗て鴨緑江の向側に居る匪賊が朝鮮の国境を越えて襲撃し日本の將校を殺した事件があつた。その時はすかさず日本の部隊が越境して叩きつけた。叩きつけると同時に、「お前の方の領内に斯ういふ不都合の者が居つたのだ、それを叩きつける為越境したのだ」といふことで、それを向ふの知事に承認させ一本証文を入れさせて日本軍はこれを持つて引揚げて来たといふやうな事件もあつたのである。

#### 8、二・二六事件發生の素因と其の影響

満洲事変が一応片付き満洲が建設されるや、日本が大いに満洲国を支持しなければならぬといふ立場に立つたが、それだけに

又満洲については十分な防備もしてソ連の方から彼これ言はれるやうなことはないやうに、又一面に於ては支那の本部からも邪魔をさせぬやうにしなければならぬ、然るに日本の国内に於ては斯る問題に関して十分な理解をもたず一にも二にも軍の攻撃をやる者がゐた。其の結果「これでは、とても日本が大陸に於てその任務を完全に達成することは出来ぬぢやないか、だからもつと軍事に理解のある政治をやつて貰はなければならぬ」と憤怒の情を洩す者も少くなかつた。これは独り軍部内に於ける声であるのみならず、民間の驕激の人々の間でもさういふことを若い者にも言つて聞かす者があつた。結局「身を殺しても御国の為になる形を採らなければいかぬ」といふことで遂に二・二六事件なるものが起つたのであつた。二・二六事件は要するにその当時の軍に対する仕向方に対する青年将校連の不満が主たる動火線となつたのである。尤もそれには行動的には何もしないけれどもどうも斯ういふやうな工合に世の中がなつては困るナと心配して居た者が先輩の中にもあつた。従つて、それ等が結局若い者を蹴起させる動機になつたかも知れぬ、と観られるのである。

当時、憲兵の中などには「若い者が此頃寄り集つて何か相談して居る様子も見える」といふので非常に心配してゐた者もあつた。併し又一方に於ては、「いや、あれ等はやんや言つて居るけれども、そんな荒い事をする筈はないんだ、」と観てゐる向きもないではなかつた。連隊長などは、まさか自分の部下がさういふ事をするとは思ひもよらぬと考へてゐた。それに丁度あの二・二六事件のある前年の十二月には連隊長などの異動が多くあの時分に事を起した部隊の上長は皆新に赴任したのである。師団長も橋本虎之助といひ、堀讓といひ二人ともそうであつた。又旅団長も連隊長もさうであつた。だから若い者がそんな事をやらうとは思ひもよらなかつたらしい。

日本内部の斯る紛争は対外的に直に外部の反響を喚んだ。例へば蔣介石等は「日本の政治力は非常に弱いのだ。軍人同士であ、いふ殺し合をするといふやうなことになつて居る。財政は実行予算々々々々で弱り切つて居るのだ。政治も軍事も財政も皆弱り切つて居るのだから日本は大したことはないのだ。」といふ風なことに言ひふらされたのである。斯やうに観ればこそ諸外国が日本の申込を一も二もなく潑ねつけたり経済封鎖をやつたりするやうになつたのである。

然しながら、国内にあつては、軍の長老連は二・二六事件に対して痛切に責任を感じたのである。「我々は多年或は教官をやり或は隊長をやり或は師団長をやつて部下の若い者を教育して来た。今の少尉とか中尉とかを直接教へては居らぬが、併しながら我々の教へた者が又彼等を現に教へつゝある。我々は何十年掛かつて斯様な不幸な事柄を起すやうな者にして居つたといふことは甚だ抜かつて居つた。これは偏へに我々軍の長老と称せられて居る者の責任である。少くとも斯様な若者を出したといふこと

は、現にその現役として共に一緒に居る所の我々長老としては陛下に対し奉つても恥しい事だと思ふ、それ故に我々は先以て自ら進退を決すべきである」といふので、阿部大將が率先総辭職を提唱した。

然るに、それに対しては異論もみないではなかつた。當時の状況を聊かこゝに略述してみたい。事件勃発の其の夜、軍事參議官連中は所謂叛乱部隊の占拠して居る陸軍大臣官邸へ、機関銃を並べて居るさ中へ飛込んで行つたが、林銑十郎大將の身の上を非常に心配する者があつたので寺内大將と阿部大將とが林大將を中に挟んで行つたのである。之等の人々はその晩徐ろに蹶起部隊代表の言ひ分を聴いた。併し之に対しては、「これ以上騒ぐことはならぬ。」といった。そしてその夜は官邸の椅子に腰を掛けて夜を明かし翌朝宮内省に行つたのである。二十八日には、叛乱部隊側から真崎に会ひたいと言つて来た。真崎は「どうしようか」といふ。長老連は「真崎行け、そして向ふの言ひ分を聴け」といふので真崎は出掛けて行つた。ところが、途中から真崎は、電話で「阿部も来て呉れ、一人で行つて誤解されては困るから」といつて来た。そこで阿部は直にあとを追つかけて行つて、二人で叛乱部隊の將校の言ひ分を聴いた。その時には「皆退らなければいかぬ、退れ」と言ふと、向ふは「この問題の解決は真崎に一任逆ふ者があれば我々は錦の御旗の下にお前達を討伐しなければならぬ、退れ。」と言ふと、向ふは「この問題の解決は真崎に一任したいと思ふ」と言つた。二人は、それに答へて「併しこの事件は真崎に一任すべきものではない。これは我々が相談しなければならぬ」といつた。真崎は、それに附加へて「向ふに行つて皆で相談して我々に返事をせい」といふや、叛乱將校連は一応引下つたが暫く経つと三人連でやつて来て「御命令の通り聴きます、ただ兵隊は二、三日、寝さないでゐたから今晚はこの儘にさせて置いて戴きたい。明日御命令の通りに致します」と答へるのであつた。そこで我々は歸つて来た。ところがその晩に外部から「やれ／＼」と突ついた。そこで翌朝になつても命令の通り動かない。であるから已むを得ず討伐といふことで軍隊が動くばかりになつて、その時に飛行機で「兵に告ぐ」といふのをやつて、言ふことをきかなければ討伐をしなければならぬので、今からでも遅くないから武器を捨て、集れとやつた。間もなく、宮城の内から見ても、或る隊がやつて来て二重橋前に整列して宮城に敬礼をして赤坂見付の方に歩いて行つて言はれた通りになつた。そこで二十九日の午前中に治まつた次第である。すると、阿部はこの機会に「我々長老はこの責任を感じて引退すべきである」と言ひ出した。ところが、「趣旨は尤もであるけれども、われわれが退いたら軍には大將が居なくなつてしまふ。參謀総長宮殿下だけがお残りになる形になる。これで万一の事があつて戦さとか何とかあると大変だ。首脳が皆居なくなるといふことになつてしまふ。さういふことでは困る」といふ意見が出たが、之に対しては「併しながら明分は正しくしたがよい。我々が退いてもいざ戦さとなれば予備の將軍が復た応召すればよい。戦時職務



といふものはあるのだからよいぢやないか。」と反駁を加へた結果、その間に陸軍大臣の川島が非常に心配して或る一、二の人に陰でいろ／＼説いた形跡もあるが——軍事参議官一同は知らぬ顔をしながら結局「それぢや」といふことで辞表提出となつたのである。併しその結果は後にだん／＼いろ／＼な事件があつたりすると、例へば支那事變のやうなものがあつて局面が広くなるといろ／＼不便なことはあつた。あの時にあの人とあの人を残して置けばこの方面に使つたら……といふことはあつた。その時分には阿部は、「その時分の人にも又これからだん／＼偉くなる人にも道義的の責任といふものは矢張り負ふべき時には負はなければいかぬ。」といふ風なことを感じてゐたからさういふ風な主張をなすに至つたのである。それで皆は阿部の副官に全員の進退伺を出させ、署名だけして貰つて陸軍大臣が之を預つたのである。ただ若い大將方を全部それに引入れてしまふことも後の為に困るから、そこで台湾から戻つたばかりの寺内、朝鮮から戻つたばかりの植田、もう一人まだ大將になつたばかりの西大將、この三人に進退伺は出したけれども残つて貰ふことにして、寺内君が大臣になり、西君が教育総になり、植田君が関東軍の南さんの後任になるといふだけの割振が出来、他は全部退いたのである。

#### 9、引退後の阿部大將

引退後の阿部は殆ど旅行に暇を潰して居つた。それは私事旅行が多かつたが、もと／＼内地のことであるから名古屋へ行くとか大阪へ行くとか、その間に昭和十二年には台湾から福州へ出、香港に出て粵漢線を通つて漢口から支那を殆ど一遍にずつと巡つて旅行をして、何応欽とか呉鉄城とかに会ひ、汪精衛にもその時初めて会つた。それから北京へも行つて、北京では当時の北方の将領にも皆会つたのである。これはただ阿部の見聞を広める為に旅行したのである。ところが不幸にしてその時には既に日支両者の間は相当尖鋭化して居つた。併し阿部が行つた時には阿部の弟子の陸軍大学を出た人達は南京で会つた時には和なごやかであつた。そして六月の中旬に東京へ戻つて七月七日にあの事件が起つた、阿部としては非常に残念に思つて居つた。当時石原莞爾中將は事件の拡大を非常に憂ひて、戦さをしたくなかつた一人であつたやうに思ふ。

### 第二、阿部内閣の成立及びその政策

#### 1、阿部大將の軍政に関係した動機

元来阿部が陸軍へ入つたのは一般的の俗な世の中から全然離れた軍に入らうといふので、御苦労様に高等学校から軍へ転換し

て行つたくらゐなのであるから、娑婆化のある仕事はあまり希望しなかつた。随て軍に於ても教育の方を主にやつて居つた。併し大学を出た関係上軍令の方も興味は持つて居つたが、軍政といふ政治の方の事はやらうとは思はなかつた。所が前述の四箇師団減をやつた直後に又兵役法の改正なんといふことが必要になつた時、そして青年訓練とか学校配属とかいふことが始まるといふ時に、丁度当時の軍務局長の畑大將が転任するその後へ行つて兵役法の事をやれと言はれて行つたのが所謂行政といふもののへの引掛かりの源であつた。そしてまご／＼して居るうちに大正十五年から昭和五年迄陸軍省の仕事をやつた。併し私が所謂行政といふものに関与したのはそれだけの経験であるし、又本来はそれよりは軍令系統の作戦とか、さういふやうな事に興味を持つて居つたのであるからそれで行くつもりであつたのが、昭和十一年に辞めてからは何もせずに遊んで居つた。随て前述の旅行とかそんな事ばかりやつて居つた。支那事変が始つた昭和十二年にも支那に行き、十三年は彼方此方と駆け回り廻つて見物をして歩き、偶々東亜同文会があつたのでそれ等の御用をも少しやつて居つたのである。昭和十五年<sup>(支那)</sup>にも満洲の開拓移民の状況を見たと思つて、北支那の方から蒙疆を通り満洲のずつと北の方に移民状態を見物に行つて戻つたのである。戻つたが、勿論政治なんといふ事はその時分には毛頭考へないで、實際やつて居る仕事は東亜同文会へ時々行く位のものであつた。

## 2、組閣の大命を拝受した当時の心情と大命降下の理由

であるから八月の末に平沼内閣が辞めた後へ持つて行つて阿部が擬せられたといふことも意外千万なのである。あの御呼出しがあつた前日位に何だか形勢が妙でとか言つて横矢君（横矢重道）が前の晩であつたかその日だつたか阿部邸へやつて来て、ひよつとすると大命が降るかも知れぬといふことであり、「いやそれはどうも……」といふわけであつた。現に大命が降つた日も平河町の会合に夕飯を食ひに行つて戻つて来たら御召しがあつた。そんな風であるから阿部としては全然思ひもよらなかつたわけで、如何なる経路で阿部の所へ大命が降つたかも実は今以て不可解なのである。「6、軍部内に於ける阿部の立場」参照

この間新聞だつたか何かに、阿部内閣が出来た時分のは木戸内大臣の何とかいふ事が書いてあつた。ところがその時分には木戸は内大臣でも何でもなくて湯浅が内大臣であつた。固より組閣なんといふ事には嘴を入れ得るわけでもなし、木戸は平沼内閣の内務大臣であるのに妙なことを言ふナと思つたのである。

横矢君は近衛さんの使ひとして私の所へやつて来た。であるから御受けをしても阿部には予てからの準備があつたわけでもなし、内閣の政綱を斯ういふ風にしてやらうといふ考へ方があつたわけでもなし、現に阿部が一番困つたのは一人の所謂幕僚もなかつた事である。宇治田直蔵<sup>(つや)</sup>（東亜同文会常任理事）に来て貰つて一緒に宮中に行つて貰つた。そして愈々大命を拝してからサ

アどうしようといふ時に、阿部家へなど一遍も来たこともない遠藤柳作君を相談相手に頼み、更に唐沢俊樹君に来て貰ひ、それからその日の昼飯を食ひに行つた時に横山君に出会つて横山君に来て貰つて組閣の準備を始めるといふわけで、阿部には個人的には親しい者はないので、一番親しくして居つたのは宇治田君だけの形で、さういふ不用意で組閣といふのはどうかと思ふやうな状態であつた。随て閣僚になる者も宝亭に来て居つた時局協議会のメンバーの中から小原直君、彼は阿部が陸軍次官の時の司法省次官であつたので、あの人くらゐが一番詳しく知つて居る方であつた。そんなわけで不用意に御受けせざるを得なくて、御受けをした殆どその刹那といふ時に歐洲に於て英独の間に戦さが始つた。

### 3、歐洲戦争不介入決意の理由

阿部内閣の当初の考は、「何といつても支那事變を早く解決しよう、これがこの内閣の任務である。」斯う考へて居つたところが、急に歐洲に戦さが起つた。成程ドイツは防共協定といふやうな關係から言へば友邦ではあるけれども、併し日本の当時の情勢から言つても、又その前には日英の間にも親善交渉をやらうとして居つたその關係から言つても、まだ英國とも話合ひをすべき仕事もある場合、この際歐洲の戦さに日本が遠くから手を出して何れに味方をするといふことは適當でないといふ考へ方から、あの時に歐洲の戦乱には「不介入」といふ事を声明して起つたのである。私は今でもそれは穩当な考へ方であつたと思つて居る。歐洲の戦さに介入しようとしても事實介入は出来ないのである。力を持つて向ふへ援けに行くことも出来ないければ、又口頭で言つたところで戦さになるものでもなし、さういふやうな事を日本が今やるよりも、さういふ余力があるならば支那事變を早く解決するがよい、これが阿部の念願であつた。

### 4、阿部内閣と汪精衛による南京政府樹立計画及全面和平問題

ただ併し当時既に前々内閣からのずつと行掛かりで蔣介石の政權はどうしても日本の真意を諒としない、そしてなか／＼和平をしようと言はぬ、何とかして支那の心ある人で日本と支那とが早く和平にならうといふことを志す人はいないか、日支和平を何とかしてやりたいといふその考のあまり、結局予てからその点については同じやうな考を持つて居つた汪精衛及びその周囲の人と手を握るの外はないといふ風に自然になつて来て、その話がだん／＼と進んで、汪精衛一派が上海に来て着々その計画を進めて居つた。それが殆ど実行に移るといふドン詰りの時が阿部内閣になつた時である。随て阿部内閣も亦この考へ方を踏襲して行くより外には途はないやうな状態になつて居つた。併し日本人の頭には何が本であつたかと言へば、兎に角日支全面和平といふ事が本であつた証拠には、一面に於て汪兆銘といふ／＼話合ひをして居りながら、他方に於て尚ほ重慶の蔣介石をして心を翻へ

さすやうにといふいろ／＼の工作が行はれて居つたのは、その成績如何に拘らず日本が何とかして全面的の和平を早くやりたいといふ事を考へて居つた証拠であると思ふ。それはいろ／＼の方面からさういふ事の運動が行はれたといふことが結局日支全面和平といふ事が一番の目標であつた証拠だつたと阿部は思つて居る。手段はいろ／＼あつたけれども、心掛けて居る人々の最後の目標はそこにあつたといふことだけは忘れてはならぬと思ふ。阿部内閣は左様な政府としての直接やつて居つたそれを踏襲して日支和平の楔として南京に国民政府の樹つことを認めて居つたのであるが、その実現するに至らずして内閣は総辞職をするこゝとなつたのである。

##### 5、阿部内閣の対欧米政策、桂冠の動機

阿部が在任中欧米の諸国と親善關係に於て成べくものを解決して行きたいといふ考へ方の現れの一つは、野村大将、即ち最も米国に知己を持ち事情に通じて居る野村大将を外務大臣に起用したといふ事である。

総辞職の理由は全然国内的の問題であつた、対外的の問題については何も故障は無かつた。国内的のいろ／＼の經濟問題やその他に因つて、率直に言つて阿部内閣は必ずしも強力と言ふことは出来なかつた。丁度当年早魃に禍されて米価を上げなければならぬとか、又物価の暴騰を防ぐ処置をしなければならぬといふことは、後になつて見ればそれで宜かつたと阿部は信じてゐるが、併しその当時の国民の満足を必ずしも買ひ得なかつた。そこで議會の大部の者は阿部内閣攻撃を相当にやつた。年末になつて辞職を強要するが如き態度も見えた。併し阿部は「これは自分の信ずる所を行けるまでやるべきである。それには議會が若し不条理なやり方をするならばこれと闘ふことも亦已むを得ない。」と斯う考へた。そのつもりで心構へをして居り、閣僚にも亦その事を話をして置いた。ところが議會と闘ふといへば「議會が此方の考をきいて呉れるか、議會がきかない場合に議會を解散するか或は内閣が辞めるかといふ三つになるのであるが、その何れかの場合に遭遇するものと覚悟して掛からねばならぬ」斯う思つて居つたところが、当時支那事變で戦さ中であつたから軍の方からいへば「軍事予算は平穩に早く通過させて欲しい。それが為には議會と争ふことのないやうにして欲しい、換言すれば議會を解散するやうなことはないやうにして欲しい、」斯ういふ希望を明らかに出して來た。そこで阿部が考へたのは、「固より好んで議會と争ひ又好んで議會を解散するといふことはしたくない、併しながら相手方が不条理な要求をすれば政府としては解散も亦辞せざるだけの責任と意氣を持つて掛からねばならぬ。それを最初から解散せぬのだといふことで議會に臨むのは戦場に臨むに武器を総て捨て、臨めといふのと同様だ、それは私の信念が許さない。併しながら陸海軍がさういふ心持ちであれば、これはもう根本に於て私のこれから先仕事をやつて行かうといふ事

は出来ぬことになるからこの際骸骨を乞ふの外はない。」斯う考へて、さういふやうな意味を以て辞職を昭和十五年の一月にしたのである。阿部としては支那事変を出来るだけ早く解決したいといふ希望を持つて居つて、それを実現し得なかつたことを洵に遺憾に思つて居つたのである。

#### 6、軍部内に於ける阿部の立場

阿部が内閣組織を命ぜられた動機が何であるかといふ事は阿部自身にも一寸解らないのであるが、阿部の軍内に於ける従来の性格は中性であつた、だから誰の派とか彼の派といふことは比較的皆が思はなかつた。無理な事といふか、一方に偏した考へ方でものをやらないといふことがあつたから、随て又甚だしい敵も無かつたわけである。そこであゝして支那事変をやつて居るし、政府と軍との間の関係を円滑にやらうとするのにはやはり軍人でなければいけまい、さうすると軍の中で何れに対しても悪くない者を持つて行かなければいけまい、それなら軍も言ふことをきくだらう、斯ういふことからそれぢや阿部にやらして見ようといふことではなかつたかと思ふ。だからその当時も民間の人も、阿部なら軍の方も抑へて行くだらう、又そんなに無鉄砲の事もせぬだらう、斯ういふやうな見方をして居つたのではないかと思ふのである。

#### 7、連絡なき軍と政府及連絡会議

然るに愈々内閣を組織してやつて見ると、戦さの方の仕事は非常にぐんぐん事態が進んで居る、そして戦時状態であるから軍の方の考が大部分の仕事を支配して居る。而も軍の仕事は大本營が主体になつてやつて居る、陸軍省と雖も大本營の一部として仕事をし、大本營の仕事に都合の好いやうに行政をやつて行くの外ないやうになつて居る。然るに政府は統帥権には喙を容れ関係することは出来ない構成になつて居るから、そこで仮令軍人の総理大臣が出来ても現役にあらざる限りは軍内の計画にも又その他の事にも立入ることは出来ない状態になつて居る。よく私が例を引いて言ふのであるが、軍の内の仕事は大きなコンクリートの堀の内で計画もされ実行もされて行くのであつて、その内の様子はとても窺ひ知ることが出来ない、随て政府はそのコンクリートの大きな囲ひそのものが何れかの方向に動いて行くといふことを堀の動きを外から見て初めて知つて居る、そして今や戦時の状態であるから政府もそのコンクリートの堀に沿つて外から歩いて行く、堀は堀でどんぐり動いて行く、どちらへ動いて行くか分らないけれどもそれに沿つて歩いて行かなければならない、これが卑近な例であるが一番適切な例だと思ふ。そこで政府としては或る程度まではコンクリートの内を覗いてコンクリートがどちらに行くかといふことを知ることが必要であるけれども、それは出来ないのであつて、ただそれを知る一つの方法は大本營と政府との連絡の会議といふやうなものに依つて知る外ない。

然るにその会議を開くといふことも容易に行はれない。阿部内閣の時には一回も行はれなかった。軍の計画等について知ることを要求したが、知ることが出来ないで終つた。恐らくはもう少し経つたら知ることが出来たかも知れぬが、遂に内閣存続の間にはその機会なくして終つた。これは一面に於ては戦争の遂行は軍が主体となつてやらなければ、若し軍事上の事について精通しない者が軍の行動を彼これ意見がましく言ふと戦争は時とすると敗北に帰することがある。それは一八七〇年の独仏戦争の時にフランスが苦い経験を嘗めて居る。要するに戦さを担当する将軍達は政治家の意見に左右されて戦機を逸し敗北を招くといふやうになつた。又開戦の刹那に於ける事情も皇帝並に内閣員の考が重きをなして戦争を不用意の裡にやつてしまつたといふやうな事になつて居るから、そこで昔から軍の統帥には素人が関与せぬ方がいゝんだといふことが一種の原則的に信ぜられて居つたのである。

たださういふ風に統帥といふものは政治その他から煩はされなくてやらなければ戦さは勝てぬものだといふ信念であつたが、それは戦さが軍ばかりで大体平常の準備で遂行が出来る戦さであつた間はよかつた、ところが近代の戦さは国民が総力を挙げて時々刻々の力を絶えず集中して行かなければ戦さが成立たない。だから軍が予ての計画を実行するだけの戦さでは短い間の戦さは出来るかも知れぬが、長期の総力戦は出来ない。そこで行政と統帥といふ事が常にぴつたり一致して行かなければ戦さは成立たなくなつたことは、昔の普仏戦争とか日露戦争時代よりも遙かに異つて来たのである。この事は我々が政治家としても軍人としても十分に心得て居らなければならぬ事であるが、併し軍人の立場から言ふと、現在受持つて居る戦さに勝つ為には絶対にその計画は他に漏れないやうにせぬと、漏れた時には屢々飛んでもない失敗を招く前例もあるから、それで責任上軍人としては成べく軍事行動については世間に知らせたくないといふ考を持つて居るのも無理はないので、この間の調和が一番困難である、これがかうまく調和が出来なければ行政もやれない、総力もうまく發揮出来ないことになる。これには阿部等もその当時相当悩んだが、微力にして遂に軍と一緒にやつて行くことが出来ないで退却することになつたのである。

#### 8、阿部内閣桂冠に対する陸海軍の態度

陸軍と海軍とが間隔したといふやうなことは無い。寧ろ阿部が内閣を投出した原因は、あの時は実は十二月二十八日だつたが、代議士連中が阿部の所へ詰めかけた、阿部は「それぢやよし、議會に於ても尚この態度でやるならばこれは闘ふより外ない」といふ決心をして居つた。そして一月四日であつたか、陸海軍大臣にもその事を言つて聴かした。ところが八日であつたか、陸海軍大臣二人でやつて来て、議會を解散するやうな話であるけれども、さうなると軍事予算が成立たないで困るからよして貰ひた

いと言ふ。それは阿部はなにも闘はなければならぬとは思はぬけれども、「併しながら自分が当然持つべき所の武器を持たないで戦場に出ることは出来ないと思つたから、あゝこれは投出すより外ないと決心したのである。海軍の方で予算の成立を非常に希望したから、内閣は犠牲にしても予算の成立はさせなければならぬといふ考であつたかも知れぬ。

吉田君が投出したのは第二次近衛内閣の時に投出したのである。

何れかといへば世間は阿部と陸軍との間がうまく行くだらうと思つて居つたのであるが、併し当時の軍務局長はなか／＼政治屋だから議会の空気を逸早く見て、これはいかぬナといふ風であつたから、寧ろ倒れるなら倒れたがよい、その後釜は考へよう、斯ういふやうな考であつたらしい。それで畑君がなるとかならぬとかいふことで準備されたとか噂されたわけなのである。

### 第三、 日華基本条約の締結

#### 1、 駐華全權大使決定の経緯

阿部は昭和十五年の一月に辞職して、丁度家族に病人があつたから大阪へ一ヶ月以上行つて居つた。ところが三月になつて「汪精衛氏の国民政府が南京に出来る。それへ使ひとして行くやうに」といふ希望を米内内閣から殆ど高飛車的に注文された。当時阿部は大阪に居つたのが東京へ行つたところが「即座にそれを受けて呉れ」といふことであつた。「さうはいかぬ、成程我々の内閣の時から和平の一つの途として南京の国民政府の成立は希望しては居つたけれども、併し自分自自行つてといふことは考へもしないし、自分に適任ぢやないから」と言つて辞退したのであるが、併し向ふは「他には殆ど方法が無いのだ」といふので無理押つけみたいにして、数次の色々な問答の結果万已むを得ぬと思つて阿部も遂にお受けをして四月中旬に出発して行つたのである。

当時阿部が任を受けて行く時の考へ方は、「日本は支那に対して特殊の野心を持つて居るではない。領土的にもその他に於ても特殊の野心を持つて居るのではなくて、何処までも支那と共に生きて共存共栄で行かうといふのである。その事を支那人に実際に示して日支和平といふものの効果の有難さを見せて、それに依つて支那事變の解決を速かならしめたい。それには丁度今汪精衛氏が出て来たのだからこれと手を握つて、日本は不条理の事はしないのだ、結局支那の幸福、日支の共存共栄を目標として総ての事をやつて居るのだといふことを示し、茲に南京政府の善政に依つて支那の国民全体に日本の真意を解らせるやうにするな

らば宜からう。」斯う考へて、さういふつもりで阿部は出掛けて行つたのである。

## 2、南京政府の性格及交渉の概要

併しこの南京政府を如何に扱ふかといふことについては日本の国内に於てもいろいろの考へ方があつて、「南京政府微力だから援けるに足らず」といふやうな考へ方もあり、或は「もつと日本は相当な要求をしていゝんだ」といふやうな考へ方もありたものであるから、その南京政府と話を纏めるといふことについても予備行為の上に於ては相当の暇が掛かつたのである。阿部は四月に行つて恐らく長くて二ヶ月位で万事万端解決するものと思つて、宇治田君にもそのつもりで無理を言つて行つて貰つたのであるが、国内のそれ等の準備が整はないので、私共が本当に話を始めたのは七月の上旬であつた。八月の下旬には両者の間の話は略々済んでしまつた。併しながらその枝葉末節についてのいろいろの異つた考へ方が国内的にあつたと見えて、阿部の話合を決めた事がなか／＼急に表向きのものでして採入れられるやうにならなかつた。九月、十月、十一月と三ヶ月間は殆ど無益に過ぎたやうなわけであつた。当時汪精衛氏も全面和平といふ事を常に口にして、その為には自らは政府を退いて犠牲になつてもよろしいといふやうなことを屢々漏してゐたくらゐであつた。阿部も亦南京国民政府といふものをただ盛立てるのではなくして、南京国民政府を介して全面和平の結果を得たいといふことを念として居つた。随て例へば徹兵の問題なども、全面和平が成立つならば出来るだけ早く引揚げようといふやうなことを言ひ、又この支那事變に関する日本のいろいろの犠牲についても之を物質的に賠償といふやうな事を希望するといふやうなことも全然無く、要は共存共栄の出来るやうにといふ事を総て主体にしてやつて居つたのである。

## 3、其の後の南京政府

この心持は相当有識者の間には解つて居つたと思ふのであるが、その後どうも結果に於ては必ずしも芳しい結果でなく、南京政府は頗る振はないものであつたし、随て全支那国民の信頼を贏ち得るといふ所まで至らずに終つた。又日本の支那に対する心持を十分に發揮するやうにその実行上に於ては至つて居らない結果は、之を補足するが如き協約がその後東條内閣時代に「新条約」とかいふ名前で行はれた。併し東條内閣時代に出来た所の約束は、結局阿部が当時行つた時の考へ方と根本に於ては何等変りはないものと阿部は信じて居る。

兎角、根本の方針としては善い事でも、出先々々のいろいろ小さな場面には於ては矢張り個々の利害といふやうなことに囚はれて大局を逸するやうな場合が往々にしてあるのである。例へば我々の習慣、我々の道徳からは尤もであると思ふやうな事でも、



相手方の習慣、相手方の道徳から言へば一向有難くないといふやうなことが屢々あるのである。これが左様な小さな事を考へないで大きく考へて行つて、相手の立場といふことをお互に理解し合つてものを進めて行くならばまだ／＼好い結果を得られたのではないかといふことを痛切に感ずるのである。要するに阿部が大使で行つて居つた八ヶ月の間に結び得た所のものはその後大きな果実を生み出さないうで終つた。併しながら心持に於ては決して悪くない心持であつたといふことを今でも信じて居るのである。

これで大使までの公の生活は終りで、それが昭和十五年の暮迄であつた。十六年は再び放浪生活で内地の各地を行脚みたいにつき、尚ほ満洲まで家庭的の旅行をして暮したのであつた。大東亜戦争は、阿部と何等の関係もなく起つたのであつた。

#### 第四、重臣會議と戦時内閣

##### 1、重臣會議開催の動機

重臣會議といふものは近衛の第二次の時だつたと思ふ。阿部が居らぬ時であつた。つまり湯浅内大臣が辞めて木戸内大臣になつて、従来湯浅氏は西園寺さんに相談して居つたところが、阿部が南京に行つて居る時に西園寺さんは辞めて御下問を賜るべき元老は居らなくなつて居つた。その前に西園寺さんが「自分達に聴くよりも」とか何とか言つたのだらう。それで十五年の第二次近衛内閣の出来る時に木戸君が歴代総理を招んで元老に問ふ代りにしたのであらう。陛下から木戸内大臣に御下問があると木戸氏は「私だけで御答へするのはどうかと思ふから歴代の総理大臣と枢密院議長の意向を聴きたいと思ひます」と、斯うやつたのだらうと思ふ。

##### 2、第二次近衛内閣と阿部大将

近衛内閣が十六年の七月辞職した時に、その理由とする所は、「国内態勢の強化を必要とするからこの場合に於て辞職する」斯ういふのであつた。その時に阿部は、「近衛氏自身が政治を担当することがもう出来ないと言つて辞職したのでなく、国内態勢をもつと強化するといふ為に一応辞めたのであるから、今度国内態勢強化に適當なる内閣を近衛氏自身が作つたら宜いだらう」といふ意見を言つた。そして結局あまり甚だしい反対なしにその儘そのやうになつた。それから後、日米関係をいろ／＼やつて居つてだん／＼切迫したのであらうが、その後の九月の御前會議などといふものも全く阿部は知らない。ただ内閣組織の時に内大

臣から一応意見は問はれた。併しその結果については内大臣として陛下に御答へを申上げて、陛下の方ではそれに依つて御下命があつたといふわけである。

### 3、重臣は全然国際情報を与へられなかつた

第三次の近衛内閣が出来てから日米関係がだん／＼と押詰つて来たといふことであるが併しそれ等の事については固より平素所謂重臣なるものは何等の情報を何処からも聞いて居らない、故に政府が諸外国と如何なる關係に於て話をして居るのか、どんな情報を得て居るのか、又支那事變の戦況がどんな状態に今推移しつゝあるかといふことは、国内国外共に何れの情報も重臣としては何等何処からも知らして来ない、これが常態なのである。随て内閣が総辞職したといつても、その総辞職した刹那に於て今のやうな問題が起つたといふのに直面するだけで、平常からそれについて予備的の考を持つといふやうな余裕も方法も手段も無い、これは何れもさうだと私は信じて居る。

### 4、東條を誰が首相に推輓したか

#### ―宮様推戴説―

第三次の近衛内閣が辞職をしたといふことで、その後継内閣について重臣の意見を問はれたのであるが、併し「我々は辞職せざるを得ざるやうになつた細かい事は一つも説明を受けて居らない。ただ日米問題に絡んで総理と軍の間に意見が未だ渾然一致しない所があるので総辞職するのだ」といふことの理由を聴いたのである。その当時阿部は斯う考へた、「ただそれだけ承つただけでは近衛内閣としてまだ／＼もつと行詰る所まで努力すべきではないか。併しもう既に投出された以上は今度はその問題について最も密接に關係をして居つた人がその後を引受けて善処すべきである。」斯ういふ考を阿部は持つて居つた。新聞にこの間田中隆吉が、阿部と林銑十郎が武藤軍務局長に唆かされて東條擁立を策したのだといふ事を書いて居つたが、それは飛んでもない間違で、阿部の信ずる所では、軍は東條内閣を無想もして居らなかつたと思ふ、故に後継内閣は東條なんといふことは思はなかつたらうと思ふ。寧ろ阿部の想像では東久邇宮様といふことを考へて居つた。それから恐らくは林銑十郎大將も同じく宮様といふことを多少は考へて居つたと見えて、当時閑院宮様かどなたにでもして貰つたらどうかといふことを言つて居つた。清浦さんは明かに東久邇宮様といふことを言つた。阿部は「元来斯ういふ時に宮様を煩すといふことは適當でない。斯ういふやうな際どい時に責任を御持ち下さるといふことは適當でない。」と思つて居つたから、兎に角「今この問題に最も詳しい人がやるべきである、近衛氏が持ち切れなくなつてその後を引受けるには、その近衛氏と最も緊密に仕事をやつて居つた人がやるべきである。だ

からそれは東條氏であらうと誰であらうと人間は誰でもよい」といふ考へ方であつた。それで結果はさういふ事になつた。木戸内大臣が憲兵の加藤泊次郎から東條説を吹込まれたといふ事がやはり新聞に田中の話としてでて居つたと思ふが、それも阿部には当時の重臣會議の空氣から言ふと呑み込めないことである。林と阿部と出て行つたといふのは滑稽だし、それを武藤軍務局長が介してといふけれども、武藤などは阿部の所などには来はせぬ。だからあの新聞に出て居る事は全然間違である。

阿部の凡て時局に対する考へ方は「その衝に當つて最も詳しくものを知つて居る者の考から遠のいて居る者には新たな名案を出し得る筈がないんだ、その日／＼日夜手にした所の情報を基にして沢山の専門家が研究をして到達し得る所の出来事に対して、その結論に対して我々が平常何等一つの予備知識も持たないで居つて之に反対する意見を出し得るといふことはあり得ないことだと思ふ。若もそれをやるとすれば、それは非常に無責任だ。」と思つて居る。さういふ見地から大東亜戦争の起つた時に於ても阿部は、「凡ゆる方面から当局が研究をしてこれより外ないと考へてやつたものを我々が引つくり返す程の材料も何も遺憾ながら持つて居らぬ、だから当局の責任に於ておやりになることは仕方がない、心に於ては如何かと思つて居つても、如何かと思ふ疑問だけであつて、それを叩き潰すことも出来ない」と考へてゐた。当時の総てに対する考の持ち方はさういふ状況であつた。責任ある当局がこれより外に方法がないと考へるならば、国民はその考を支持して御国の為になるやうにと働くより外には手はない。

##### 5、東條決定の重臣會議の真相

当時、若槻は「宇垣さんはどうかといふ」話をしてゐたけれども問題にならなかつた。広田は陸海軍の意向を聴けといふやうな極めて曖昧であつた。岡田さんはそんなに言はなかつた。平沼さん、岡田さんなんといふ人はあまりハッキリしたことを言はぬ。その時は近衛公は出なかつた。本来その時の総理は出ないから：

##### 6、東條は対米政策の再検討を行ふ

要するに軍部大臣を選ばよい、問題は結局それとの間の問題だから、之を誰が行つて片付けやうにも片付け様がない。それであの時には東條が更に研究し直したのだ、そして随分細かい研究をしたらしい、もう一遍戦さにならぬ方法はどうしたらよいかからやつたらしい。それを陛下に巨細に申上げた。だから九月六日とか何日かの御前會議は、これはもう一応出直して研究し直したのです、だから陛下の方からもさういふ風に御註文になつたのだらうと思ふ。海軍も研究のしなほしには相談に与つたであらう。近衛氏は自分が投出した所までしか書いてゐない。

## 7、小磯内閣奏薦の重臣會議の真相

東條内閣瓦解後の後継内閣奏薦に関する重臣會議に於ては、原嘉道は重臣全部、近衛さんは鈴木、阿部は米内をして内閣を担当せしめようとしたのであつたが、結局寺内が第一位、第二位が小磯、第三位が鈴木、それが結局近衛、平沼の要求で小磯、米内の二人に決つたのである。

## 第五、翼賛政治会と阿部総裁

## 1、総選挙実施前後の实情と「翼賛政治協議会」設立の動機

昭和十六年の末に大東亜戦争が始つたが、——これはあゝいふ作戦が行はれるといふことは阿部も当日発表されて初めて知つて驚いたのであるが、同時にその成果の大きいものにも驚いたわけであつたが、——翌十七年になつて阿部はこの戦さが始つた以上はうまく行くことを偏に祈願して止まなかつたのである。十七年の二月大東亜戦争が始つてから二ヶ月半位経つた頃に議會が総選挙を行つた。この議會は本来はその前の年に総選挙が行はれる筈であつたのを支那事變の關係上一年延ばさうといふので延ばしてあつたのであるが、あまりにも顔ぶれが古くなり過ぎて居つて、若し戦争の為に議會の選挙を何時迄も行はないで古いメンバーであると、世の中の変化は激しくずん／＼進んで行くのに、独り議政壇上に於ける人々だけは古い顔ぶれだといふことはどうも實際に合はない。この際は新しい人々を出さねばならぬ、そしてこの事態に即応した議會らしいものを拵へることが必要である。必ずしも政府の言ふ通りになるとか何とか、さういふ事を毫も考へない、兎に角この事態に即応した十分な知識を發揮し得る議會が欲しいのだ、これは当然の事であつたと思ふ。これが為にどうしたらさういふ議會が出来るかといふことを政府が研究したと見えて、三十数名の貴衆兩院議員及びその他の各界の人々を總理が招んで、「自分は今言つたやうにこの重大なる事態を乗切つて行く為に新進鋭の人々に依る所の議會を拵へることが宜いと思ふから総選挙をやらうと決心したが、どういふ風にしたらさういふやうな立派な議會が出来るかといふことについては一つ皆さんでお考へを願つて工夫をして戴きたいと思ふ、一に皆さんの研究に俟つ」といふ風な挨拶があつて、そのまゝ、總理はその席を去つてしまつた、あとはその選ばれた連中だけの相談になつた。

阿部がどうして總理に招ばれたかと言ふと、それは矢張りあゝいつた陸海軍の軍人も若干は出す、それには誰を出す彼を出す

とあまりに偏したのではないといふのであつたらうと思ふ。慥かあの時は陸軍では阿部と小磯、海軍では高橋三吉君と末次信正君であつたと思ふ。それで総理はたださういふやうな希望といふか挨拶を述べて、「どうでも良い議会をつくることを工夫して貰ひたいのだ」といふ事だけで席を去つた。それから後座長が出来て、総理の言ふ事も尤もだから何とかお互に研究しようぢやないかといふことで、研究するについてはこの今集つて居る所のメンバーで協議会を拵へて仕事を進めるのに都合の好いやうにしようといふことになり、「翼賛政治協議会」といふ名前を拵へて、それから会長に誰をするかといふ時に、それはその時の座長の指名であつたか何かで阿部がやらざるを得ぬやうになつたのである。

## 2、阿部大将と東條大将の関係

世間では東條総理と阿部とは非常に密接だといふ風に言つて居る者もあるが、実は極めてあつさりして居るのである。大正四年に東條君が陸軍大学を卒業する刹那に於て阿部は彼処の教官をして居つて簡単な科目を受持つたことはある。それから後ずつと会ふことなしに過ぎて、其の後陸軍大学の教官として東條君が来たことがある、それから陸軍省の下で東條君が勤めて居つたことがある。併し公務上に於ても私交上に於ても阿部大将は何等他と異なる所がなかつた。殆ど私行上の事なども知らぬくらいであつた。その後も公務上に於ては時々接触はあつたが、特別の関係も何も無かつた。東條が陸軍大臣になつてからも亦同様で、阿部大将は気の付いた事は陸軍に斯んな事があるさうだが如何かといふことを言ひに行つたことはあるが、特殊の関係は無しに進んで行つたのである。随て東條が内閣を組織する際に於ても阿部は、「近衛内閣の瓦壊の因をなしたその当の責任者が事情を一番よく解つて居るからそれがやるべきである」斯う考へて居つた。その当時から、「それが東條であると杉山である」とに拘らず当の責任者たる陸軍大臣がやるのが適當である。斯ういふ意味に於て総理に誰がよい」といふことの主張を持つて居つたのである。偶々それが東條が陸軍大臣であつたから総理大臣になつたといふだけの関係である。ところが、さういふ風に総選挙に係するやうになつたものであるから、比較的当局とは間接ではあるけれども密接な関係があるやうに見えたわけである。

## 3、推薦選挙を決定した理由

そこで総選挙は一体どういふ風にやるのがいゝだらうかといふ事をその集つた人々でいろ／＼研究した結果、「兎に角従来の代議士以外に尚ほ広く人材を集めるといふことがこの戦争最中に総選挙をやる一番の目的であるから、さういふ候補者を採させることが一番必要なんだ、ところが事実選挙民になると如何なる人が従来の代議士に代つて尚ほ立派な仕事を為し得る人であるかといふことを実は知らない、自分の郷土出身の人で相当偉い人が居つて東京に多くは行つて居る、他に仕事を持つて居るといふ

風で、郷土に土着して居る人ばかりが必ずしも良い候補者だと言へない」といふことを考へて見ると、なか／＼選挙民が良い人を選び出すといふことが出来ない、個人々々としては知つて居つても選挙の大きな流れを動かすといふ風の候補者を選び出すのはなか／＼難かしい。だから選挙民に「お前の選挙区から出すのには斯んな人が居るぞよ、それは今土地には居らぬけれども東京に居るぞよ、或は満洲に居るぞよといふことを紹介してやるのが第一着に必要だ。選挙法に依ると第三者の推薦に依る候補者といふものがある、今はその条件を持つ候補者を推すことが選挙民に未知の候補者を知らしめる方法だらう、だからこれは推薦といふ事を一つやらうぢやないか、その推薦を第三者として我々がやらうぢやないか」斯ういふ事になつた、これが推薦選挙が行はれた所以であつた。だから選挙民の知らない人でも紹介してやらう、固より従来代議士であつた人の中のこれと思ふ偉い人又選挙民が信仰措かざる人が出ることは当然の事であるから、さういふやうな人を予め知り得たならばそれも推薦の中に入るのは当然だ、さういふやうな意味合で推薦選挙といふ原則を採つて、さてそれぢやその推薦は東京で拵へた協議会で日本全国の候補者を物色して推薦候補者を拵へ得るかと言ふと、これは出来ない事である。それはその土地々々で相当有力な人を探し出して選挙民に紹介するといふ方法が一番間違ないぢやないかといふので、そこで各府県に協議会の支部を設けて、その支部のメンバーにはその土地の有数な人であまり一方に偏するといふやうなことの無い本当に選挙民の爲を思つて候補者を物色するやうにするのに恰好人々を頼んで、それ等の人々でよく詮衡して自分の郷里からは斯ういふ人、斯ういふ人、斯ういふ人を候補者にしたならば宜からうと思ふといふことを下調べして貰つて、その下調べをしたものを今度東京の本部に出して貰つて、本部がそれを拝見して穏当であると思つたらそれが協議会の推薦候補者である、若しどうも腑に落ちぬといふ事があれば支部と本部と又よく話し合ひをして然る後に本部の名に於て候補者を推薦するといふ事にしようといふのでその通りやつたのである。だから各県共にその支部の仕事をする人は今まであまり一方に偏したといふ人でない人を選んで、実業家も居ればお医者さんも居れば軍人も居ればいろ／＼な人が網羅されて、十名乃至二十名の詮衡委員みたいのものが出来てやつたのである。ところが事実には、選挙法に於ては立候補といふものがなければその人を選んでも無効である、だからどうしても候補者自身が「それでは立ちませう」と言ふことが必要である。だから何々博士とかいふ人でこれならば宜いだらうといふことでやつて見ると立たうと言はない。斯ういふわけで国民から見ただけならば或は不満足候補者も相当あつたかも知れない。併しそれでも兎に角あゝでもない、斯うでもないで選りに選つておるのであるから、従来のただずつと仕来りで一つの株となつて居つたのとは聊か異つた顔ぶれが出ると

いふことには実際はなつたのである。それが従来の人よりも偉いか偉くないかといふことは別問題で、我々がその当時考へたのには、第一回の推薦選挙で直ちに理想の議會は出来なないといふことを熟々候補者を選んでから考へた。それで二回三回とこの方法を以てすれば選挙民もよく解るし、又立候補する人も安心して立候補するやうになる、だからこれは二回三回やらなければ本當の推薦選挙の味は出ないと思つて居つた。併し出ようとしてぢたばたした連中から見ると恨骨髓に徹した連中が多いのである。而も従来代議士の中の大部分はオミットされなければならぬ。その代りに推薦された者は、これはまるで神様が箔を附けてくれたやうに思つた者がある。後ではいろ／＼悪口を言ふ人があるが、自分は神からでも選ばれたやうに吹聴した人もある。併し事實さういふ風に念を入れて推薦した候補者であるから事實この人達は箔が附いたやうな恰好になるから、そこでその選に當つた人と當らない人とは格段の差が附いたことは否まれないと思ふ。併し本来が善い事であるから万難を排してこれで行かうといふことで選挙はこの制度に依つて行はれた。中には推薦の仕方が不都合であつたとかいろ／＼な苦情も無いではなかつたが、本部としては相当念を入れて公平にやつた筈である。随て因縁といふか、いろ／＼な關係からいつたならば捨てにくい人をやはり支部の意向がさうでないといふので捨て、しまつたといふやうなものもある。その当時のさういふやうな心持については『読売』に一寸自分で筆を執つて書いた断片的のものが印刷物になつて居るものもあるが、それには私は、こゝには候補者の数が決つて居るからそれだけの人を推したけれども、併しながらこれ以外にも人物は沢山居るのだから、これ以外の人で良い人が當選して出て来れば我々は大いに歓迎する次第だ、ただこゝでは決められた数を推薦をしなければならぬ、良い人でその推薦から落ちた人も多数あるのだ、選挙民が認めて宜いといつて出て来る人があれば固より結構であると言つたのである。ただいろ／＼の事情で支部の方からの推薦に漏れた人で相當世間が見ても偉いと思ふ人があつた、それ等の人は當然推薦されなくても當選して出るだらうと思ふ知名の士があつた、それ等の場合にはその選挙区に於てその知名の士の出るといふ所には推薦候補者を会に出さなかつた所も数選挙区ある。これは我々のそれ等の人々に対する敬意といふか、選挙民の心持を酌んでといふか、兎に角さういふ措置を執つたのである。

阿部自身としてはそんな事は極めて不慣れの事であるから選挙それ自体についてはさつぱり分らなかつたが、併し本部に居る人の中にはさういふ事に物慣れた人も居つて、それで適当に采配を振つてやつたのである。その結果は八割何分か推薦した人が出た、残りの一割何分は推薦しなかつた人であるから、協議会の方から言へば一寸無關係の人のやうな形であつた。協議会といふのは代議士に良い人を出すのについて工夫をして貰ひたいといふ事だけであつたから、総選挙が終つたら解散をするといふ事

に最初から決つて居つた、随つて総選挙が済んだので解散をしたのである。

経費は詳しい事は分らぬけれども、主として各方面からの寄附に依つてやつた。併し大して金は掛かつて居らぬ。

#### 4、翼賛政治会創立理由と阿部総裁就任の経緯

それで一応選挙は終つたが、さて選挙が済んで見ると今度は議員が皆出て来る、これ等の議員が考は何処にあるのかと言ふならば、この戦争遂行の為に議会で立派な協賛をしてやつて行かう、固より是を是とし非を非として政府を鞭撻してやつて行く任務を持つて居る、けれども斯様な戦時の状態であるから皆の者が極力一団となつて議会本来の任務を遂行するやうにやらなければならぬそれがこの度の選挙に於ては従来の政党の政友会とか民政党とか、さういふ風な団結に依つて行はれて居らないのであるから、集つて来た者は言はゞ各個各別の状態にある、それでは議会の運営は事実出来ない、そこでこれが一団になつてやつて行くやうにする必要がある、要するに子供は生れたが、併しその子供が皆一緒になつて一家族になつてやるといふことをやらせなければ、これは龍を描いて点晴をしないといふのと同じだ、だから之を一つ一纏めにしたらどうか、少くとも議会をして一団として仕事をするやうな方向に向ける必要があるはいふことかといふことで、又政府としても強力な議会としてやつて貰ひたいものだ、てんぐ／＼バラ／＼で取止めもないやうなことでは困るからといふことで、総理が又人を招んで、議会の挙国一致的の団結をやつてこれから先それに依つて政治の推進を図るやうにお願いしたいものだといふ希望的の事を挨拶として述べて、それから後それ等の人々に依つて又相談会があつて、そこで茲に一つ政党的の団結をしようぢやないかといふことで、その準備委員を拵へて、それに依つて所謂翼賛政治会といふものを成立たせるやうになつたのである。

阿部個人から言ふと、選挙そのものが不得手の事をやつて居るのであるし、それが済んだのでヤレ／＼といふところへ、折角やり出したのだから、その後の括りを付けろ、つまりバラ／＼で産んだものを纏めるといふ纏め役だけはやれといふことであつた。これは阿部はやらぬと言ふものだから数日間もめたのである。兎に角阿部は「自分が総裁をやることは自分個人としても不適格であるし、又総裁になつての立場も実は困る。政府に氣に入らぬ事があるからというて打壊しをやるといふことも私としては心ならぬ事だし、さうかといつてただ盲従して居るといふことも心ならぬ事であるから自分では御免を蒙りたい。」と言つたのであるが、併し「今更さう言つて貰つては困る」といふことで会員の中でやかましく言ふし、それで結局悩みに悩んだが已むを得ず勢でやらざるを得なくなつたのである。阿部はその当時京都の天龍寺の坊さんの書いたものを読んで「莫妄想」の一節について一寸考へて居つた事があつた、そんな事の不審も聴かうと思つて居つた時にこの問題に打つつかつたから、家へ帰るなり高



倉の所へ電話を掛けて、切符を用意させ翌日の燕で単身京都へ行つた。電報を打つて置いたから和尚さんが駅へ出て来て居つて、車で一緒に天龍寺へ行つて、そこで阿部の不審に絡んで、「実は斯ういふ問題もあるのだ、従来の行懸りがある、今の私としてはそれには関係したくない。どうしたらよいだらう？」と言ふと、和尚、「自分にはやれる、やれぬといふ自分の力を評価して、平たく言へば自惚れることなしに、自ら必要とあれば地獄へ落ちるんだナ、自惚れずに地獄へ落ちるんだナ、」と言つた。今でもそれが阿部の帳面に書いてある。それがその晩のことである。それから再び翌朝七時の京都発で歸つた。丁度阿部の子供が京都の駅へ来て大津まで一緒に来た。そして手紙を渡して歸つて行つた。見ると、その問題で「すつたもんだやつて居るさうだが併しものを拵へた以上そのものを動かす責任は当然だ、この為にどんな事が将来起るかも知れぬ。併し自分達は親父のお蔭で何とかやつて行けるやうになつたから、もう親父は自分自身の事だけを処理なさい。他は心配する必要はないから……」と、斯ういふやうなことで親父阿部から見れば、「結局は矢張り生意氣にやる方に賛成のやうな事を書いた手紙」を置いて行つたのであるが、そんなやうな事情で阿部も決心せざるを得ぬやうになつた。併しながら阿部はそれでもまだ「会員の中の各種各様の人々が皆本當に研究して、どうしてもそれより外ないといふやうなことが確められない限りは一寸出るわけには行かぬ」と言つて、歸つてからさういふやうに回答をして、結果は彼等はさう決めてしまつて掛かつて居つたからやらざるを得ぬやうになつたわけである。

##### 5、翼賛議会の使命

戦さが始つた以上はその戦さに日本が敗けては相成らぬといふことは誰も常識で考へる事で、さうすれば各々自分の尽せる力、分相應の力を尽すといふことは当然のことであるから、偶々さういふ政治的の所へ置かれた以上は政治的分野に於て分相應に當るといふことも覚悟の前だと思つて従来さういふ意味合に於て微力を尽して居つた。併し議会の開ける毎に凡ゆる機会に代議士には、「議会の本分は政府をして確かかり仕事をやらして行くことにあるのだ、これが為には是を是とし非を非として十分に本分を尽すやうにしなければならぬのだ」といふことは絶えず注意を与へて居つたのである。併し何といつても敵を目の前に置いて戦さをして居るのだから、小さな問題について平常に於ては彼これ議論をすべきところでも、それは議論を聴いて三日掛かる仕事は一日でやつてしまふといふことに依つて、政府が又敵に対して三日掛かつてやる仕事を一日で片付けさせるといふやうにやることは当然の事であるから、外から見ると一も二もなく何もかも政府に盲従して居るやうに見えたけれども、必ずしもさうではない、問題によつては相当もめた問題も出来て来て居る。併し戦さの時に於ては平常的問題はやつて居る間もないから、成べくそんな問題は政府も提出しないし議會も持出さないといふことになるから、見かけは極めて平凡のことになるのは当然で

ある。これは単り議会のみならず、世間一般の事が総てさうなのである。

#### 6、何故東條内閣を支持したか及、翼政総裁辞任の理由

それではどうして翼賛政治会を辞めたかといふ事であるが、私は斯ういふ戦さがあれば最初からずつの計画に携りその日の日の変化に悉く努力して居た者が成べく変らずに戦さを遂行することが一番必要だと思ふ。飛入りでいろ／＼な責任者が變つてやれば必ずその間に隙が出来る、従来のやり方をすっかり自分の頭に入れて更にそれから新しい事を考へ出すといふ迄には、此方はさういふ事をやつて居る間に戦局はどん／＼進んで行くから、非常な不都合がない限りはその儘に続けて行くことが一番大切な事だ、斯う考へたから、それで阿部は「東條内閣なるものも出来るならばその儘で戦争を続けさすことが必要だ。」と考へた。それを阿部が東條をバツクして居るとか東條と組合つて居るといふ風に世間は見て居たのであらうと思ふ。これは阿部は東條であらうが誰であらうが、その局に當つた者には最大の力を尽させる、その為には無暗に人を変えてはいかぬといふことが議論の本旨であつたのである。

そこでさういふ風にしてずつとやつて行つたのであるが、最後になつてどん／＼と東條の評判も下火になつて来たし戦争も思ふやうに行かぬやうになつて来たからあゝでもない斯うでもないといふ議論が出て来たが、それならば雁首を變へることに依つてこの戦さが軍に好い方に行くかと言ふと、阿部は相當に疑を持つて居た。「悪いものならば誰がやつても悪いのぢやないか、それから多少なりとも好くするには現在迄の事を知つた者がやるのがいろ／＼と工夫して宜いぢやないか。さういふ意味合から今迄も外部から協力して居つたのであるが、それに依つて十分に局面が展開するといふことがないのにボンと變へるといふのは非常に考へものだ、若しさういふやうな事態になつたならば我々が従来協力して来たことも無駄になるやうになるし、予て私は翼政が出来て総裁になつた時も適當の機会があつたならば一つ適當の後任者に譲りたいといふことを屢々考へて居つたので、左様な変化がある機会に於て自分自身も退くのが適當ではないかと思つて居つたから、東條内閣瓦壊を動機に自分も退くことになつたのである。」偶々それが朝鮮総督に行くといふ事と話が相前後してごつちやになつてしまつたけれども。阿部も辞めやうと思つたけれども、兎に角政局が安定する迄は総裁を辞めるなといふことで、小磯内閣が成立するまで待つて其の上で辞めたのである。

#### 7、政府、翼政、翼賛の三位一体

翼政と大政翼賛会の関係は何もない。ただ人事が同じ人が居つたといふだけだ。

それから昔から選挙肅正とか選挙の公正といふ意見があつた。翼賛政治協議会の団体と異つた方向でやはり選挙の公正といふ事を叫んでやつて居つた田沢義輔とか堀切善次郎などの連中もあつたが、これは従来の選挙がまづいやり方が多いとかいふので、この選挙を立派な選挙をさせる為に選挙民の教育をして歩いたといふことがある。大政翼賛会もさういふやうな事には一口加つてやつて居つたかも知れない。併し我々がやつて居る所の翼賛政治協議会の選挙に大政翼賛会が片棒を担いでやるといふ意味合はなかつた。ただ愈々選挙が終つて翼政が成立つた、翼政は政治部面を、大政翼賛会は国民の実践部面を受持つ、政府は行政部面を受持つといふことが各々立場々々でこの日本の戦時状態を好くして行くといふことであつたから、結局立法部面と社会の実践運動と全搬<sup>マツ</sup>の政府の仕事、これが渾然一体になつた時に初めて立派な国務の進行が出来る、国運の進行が出来る、そこで三位一体々々々、斯ういふことを頻りに言つた。三位一体は翼賛会が翼政の仕事をする、翼政が翼賛会の仕事をするのでなくて、各々その立場々々の分野の仕事をやつた総和が立派な国全体の仕事になるのだ、斯ういふのが三位一体であつた。

## 第六、 東條内閣と重臣会

### 1、東條内閣時代の重臣との連絡会議

東條内閣時代、重臣と称せられたのは元総理大臣であつた者と枢密院議長、それだけである。これが内閣の組織について相談的に話を受けたのは第二次の近衛内閣が出来た時からであるから第二次近衛内閣、第三次近衛内閣、東條内閣、この三代の内閣の時だけにあゝいふものがあつたわけである。然るに従来の近衛の第二次、第三次内閣ではさういふ人々を集めて時の事情を話をするなんといふことは一度も無かつた。そこで東條内閣になつてから初めてそれ等の人々に戦況や、情報の話をすることにした。「何も聴かさずに置いて、いざといふ時に我々の意見を聴くといつても何にもありはしない。」又「お氣付になつたならば遠慮なく話して下さいといつても、その材料が無いものであるから何もいへぬ」といふことからそこで偶々一ヶ月に一遍とか二ヶ月に一遍とか官邸に招んで、主としてその時の財政の状態であるとか、軍事については陸海軍の将校が来、又外務大臣や大蔵大臣などが来てその時の情勢を話をする、それについて質問する人もある。併し質問といつても殆ど何も言はぬのが多かつた。それを聴いて後で食事をして歸つた、斯ういふのであつた。最後になつてからは総理の方からばかり招ばれて居らないでこちらからも招んだらばといふことで、華族会館に総理に来て貰つて話をするといふこともあつた。併し立入つた話はなくて、その時々

の話だけであつた。若槻といふ人は質問をするのにも、「私は何にも分らぬが……」と言ふのがあの人の口癖なんだ、最初にそんな前置きをして聴くのだが、併し聴く事柄は世間の素人としては質問しさうな事を遠慮なしに聴いてゐた。

## 2、東條内閣瓦解の動火線となつた重臣の会合

東條内閣が辞める時に、重臣四人か五人集まられて相談されて、結局阿部が最後に「これは辞めさう」と言つたといふやうなことがあの時分に伝つて居る。あの日はもう東條の方も、いろいろの問題が相当あつて、重臣の人々の中の若干の人を閣僚の中へ入れようとか、或は軍の方にも喙を容れるやうにしようとかいふ風にだん／＼折れて来て、さういふ風な事についてのいろいろと工作をやつて居つた。阿部等重臣が考へて居つたのは、「重臣の人全部を閣議に列するやうにするがよい」といふことを言つて居つたのである。「併しそんなに沢山の人が集まつては纏らない」とかどうにか心配する者も居つたが、「そんなことは心配しなくてもよい」とかいふことを言つたのであるが、「米内君に入つて貰ふ」とか何とか言つてやつて居つた。丁度阿部が家に歸つて居つたら呼びに来た、行つたところが、それより数時間前に近衛、平沼等が集つていろいろのことをやつて居る。そこへ阿部と広田と米内と行つた。すると「内閣もこのやり方では心許ない」といふ話があつた。その時に広田氏は「自分はいれと言はれた。米内君は海軍の方に入れと言はれたといふ風な話があつたが、そんなことでは駄目だ」といふ話でした。それで結局「今のやうでは困る」といふやうな意見であつた。阿部は「私として予てからの意見が、事実今思はしくない、併しそれなら他の人が代つてやつて明日から好くなるといふのならば、これは叩き潰すべきであるが、併しさう行かない時には困るのだから出来るだけ最後の手を尽さすべきである」と言つたが、それには殆ど共鳴者は無かつた。そこで「マアこの程度で別れよう」といふことであつたから、阿部は兎に角「今承つて居る所を見れば東條内閣には協力しないといふ事に結論がなるやうだ。それならば東條の方でもさういふやうな考へ方で行かなければいかぬだらう。私から東條にさう言つてよろしいか」斯う言つて訊いたのである。「協力しないといふわけぢやない……」と言ふ。「併し結局は協力しないといふことに結論はなる、これをどういふ風に改めさせてとか斯ういふ風に力を入れてとかいふやうな積極的手段は少しも講ぜられずに、ただ氣に入らないといふことであれば結局協力しないといふことになる。」「さういふ意味ぢやない、強力は吝まぬけれども……」と言ふ。「よく解りました、注意してやりませう」といふことで、それから阿部は秘書官の赤松を招んで、今日斯ういふ話だつたといふことを言つて聴かした。さうしたら向ふでもそれで肚を決めて「ぢや辞めませう」といふことになつたのである。

## 第七、朝鮮総督時代の阿部大将

## 1、小磯首相新任と同時に朝鮮総督就任を要請

以上のやうな経緯を辿つて小磯に大命が降ると、小磯は直ぐ阿部等の居る所へやつて来て、「今大命が降つた、何分宜しく…」と言つて帰るといふ時に阿部を横へ呼んで、「私が斯うして大命を拝した以上は後をやつて貰ひたい」と言ふ。「いやそれは困る、今斯うやつて漸く重荷をおろしたところなんだから困る」と言ふと、「併しどうしてもやつて貰ひたい」と言ふ。その時には双方共「やれ」「困る」で急ぐ時だからその儘物別れになつた。それから翌日愈々「組閣について翼政会の協力を得たい」といふことを電話で阿部に言つて来た。そこで阿部は、「それはいかぬぞ。兎に角阿部と小磯の關係に於てはそれでもよいかも知れぬが、翼政会に対する要求としては君が来なければいかぬ。僕も翼政会に行つて居るから来給へ。そして其処で正式に申込給へ。」と答へたが、小磯は「さうか」といふので翼政会にやつて来て、「今度大命を拝して組閣をするについては翼政会の全般的の協力を得たい。尚ほ若干の閣僚も出して欲しい」斯ういふことを正式に申出でたのであつた。それに対して、阿部は、「いづれ主な役員と相談をして然る後に翼政会の態度を御返事をする。併し前田氏が来て居るから前田と会はんか」と言つて、前田と会つていろいろ話をしたが、その後で小磯は朝鮮問題を再び持出した。「どうしてもやつて呉れ」と言ふ。「朝鮮はこれから先非常に難かしくなる、戦さがあゝいふ状況であればある程難かしくなる」、「マア一つ考へて置く」と言つて、午後迄に総務会を開いて小磯君の注文を相談をして、「それは協力しよう、大臣も出さう、万事は総裁や総務会長に任せる」といふことでその場は一応開いて、それから阿部は小磯の所へ午後に行つて、「翼政会としては協力する、大臣もこれ／＼の者が…」といふことで、前田君が入ることだけはその時に決めてしまつた。それから阿部は戻つて翼政の總裁をその時に辞めることにした。東條氏が辞職した時に話してあつたのであるが、「併し今組閣が出来ないうちに辞めることは困るから」といふことでその儘になつて居つた。それで阿部が翼政の總裁を辞めるのと朝鮮総督になるのと同時であつたものだから世間では「朝鮮総督になる為に總裁を辞めた」といふやうに觀て居るかも知れないが、事實は今述べた通り全く違ふのである。

## 2、朝鮮統治の基本方針

その時に阿部は朝鮮については何も予備知識は無いものであるから、斯ういふ戦さの時であるから朝鮮の人が戦さに協力する

やうに一步でも二歩でも進めることが何よりも大事である、ただ朝鮮の農作物が昭和十七年、十八年、十九年と旱魃の為に非常に悪い、それから日本の労務関係上朝鮮の人を沢山こちらへ招ばなければならぬ、これ亦非常な悩みの問題である。然るに阿部が行くといふ時になつて十九年度に出すべき労務を倍以上に殖して貰ひたいといふことを言つて来た、これ亦非常に難しい。労務がそんな状態で、向ふの人間がどんな気分であつて来るかといふことは非常に難かしい事であつた。昔は朝鮮の人は沢山内地へ来て下関で食止めるのに骨を折つた。ところが近來は此方から呼びに行かなければならぬ、この間の事情がどうなつて居るか判らぬ。併し何れにしても国民の気分が皆戦さに向くといふことが第一に必要なものであるから、人心をしてよく理解させることが主だと思つて居つたから、阿部は着任の時の訓諭も、その後向ふに居つた一年ばかりの間の凡ゆる機会に於ての訓示訓諭も、「ものは国民の理解の下によく教へてやるのだ、兎に角誠と親切と忍耐でやらなければいかぬのだ」といふことを凡ゆる機会にやかましく言ひ、殊に末端の官吏、警察官といふやうな者の行動が往々にして民心を悪くする例が随分多いからその点については篤と注意をしてやる、又司法官に対しても楊枝で重箱の隅を掘るやうな、又法の末節に拘泥して大綱を失するやうなことをやつては罷りならぬといふ事については随分手厳しく言つて居つたのである。だから何れかと言へば、役人を叱りつけることに急であつて、これでは怪しからぬぢやないかといふことを言ふ者も相当にあつたらうと思ふ。又内地の人も「鮮人の事ばかり言つて居つて内地人の事は顧みぬ」といふ風に考へて居つた人もあつたかも知れないが、私は可なり荒つぽい事を言つたのである。それから地方長官などに対する訓示も、訓示として最初から用意されたものは相當に筆を入れたが、新聞などに出るものだからそのつもりで考へた。會議の終りに結論的に訓示する時は草稿などは持たないで自分の考を言つて居つたものである。地方に行けば固より草稿無しでその地方々々に応じた気分を以て訓示をした。兎も角も私の考は、先々代の総督などがどういふことを言つて居られたかには拘泥しないで、現場のあの戦さの状態に於て民心が如何に速<sup>はや</sup>ひ、極端に言へば離れんとする者もあるといふその場に於て誠意を披瀝してこの戦さにのみ努力したのである。どの新聞だつたかこの間南、小磯、阿部三代の失政とかいふので書いて居つたが、歴代総督共に朝鮮の為に日本になるかといふ事については随分苦勞して居られたことは間違ないと思ふ。ただ私の時はサイパン島が陥ちた後で朝鮮人の大部分は「この戦さは敗けるのだ」といふ風に思つて居つた。ただ「戦さは敗けても飯が食へるやうにして呉れ、ば何処の国に附いてもよいのだ」といふ頭で居る、九割はさういふやうな頭で居る、それから一割弱が「日本と手を握らなければ結局いかぬのだ、日本が敗けては困るのだ」といふ觀念、又一割弱は先天的に日本は氣に入らぬのだ、「日本は朝鮮を取つたのだから独立しなければいかぬのだ」といふ堅い信念を持つて居る。「日本でなければいかぬ」と

いふのと「日本は絶対にいかぬ」のだといふのは各々少数で、あとは「何方でもよい。」のである。ただ戦さが思ふやうに行かぬ時で、食料の供出、労務の供出が重つて居るから非常にやりにくい時期であつた。配給は困難になる。併し阿部自身は、やるだけの事はやるより外ないと思つてやつて居つたから、その点に於ては何処へ行つても少し呑気過ぎるかも知れないが…。

### 3、終戦後の処置と京城の実状

終戦後、八月九日だつたかソ軍がいよく離縁状を叩きつけて敵側に立つた。同時にもう図満江を越えて朝鮮に入つて来た。

清津の沖には艦が入つて来るといふ状況になつて八月十五日にならない前に北朝鮮は戦場状態になつて来た。総督側の観測から言ふと、あれがグント入つて来れば手薄の未だ準備の出来ない北朝鮮の方に機械化兵団がグント入つて来る、これはソ軍が京城まで間もなく入つて来る、斯う思つて居つたから、書類などは焼いたといふのは内地に於ても同様の事なのである。物を皆バラ撒いてしまつたとかいふが、自分が盗むのではなくて、敵に取られるより寧ろそれなら皆持つて行け、斯ういふことになつたものであると思ふ。朝鮮に於てもやられるぞといふ覚悟はさういふやうな所まであつたわけである。ところが八月十五日に終戦になつて見ると、これから先実は日本の息の掛かつた者を出来るだけ多く残して置く必要がある、如何なる状況になつて朝鮮が独立するにしても日本に対して好意を持つ所の人間が多く居らなければ困るのだといふことで呂運亨とか、あゝいふ者を間接に使つて平和にこの所を切抜けて行くやうにしようぢやないか。又沢山の内地人が居るのだから、これ等の内地に戻つては根拠も何も無い連中、そして何十年と朝鮮で仕事をして居つたといふ人も朝鮮人とも早く仲好く暮して行けるやうにしたいものだ、それには在来の朝鮮の人間の中で穩健に政治的の力を持つて居る者を出来るだけのにしようといふことで、朝鮮人の中で従来から連絡のある人々を通じてその点を仮令独立するにしてもよく日本を諒解する者に依つてやらせようといふことをやつた。それが呂運亨、安在鴻といふやうな連中を使つたわけなのである。ところが呂運亨、安在鴻はその点がよく解つて居るのであるが、之に随いて居る若い者は、「さア独立だ、八月十五日を以て日本の主権は無くなつたのだ、我々朝鮮のものだ」といふことで、そこで意地の汚い連中がワアツとたかつて警察も何も取るといふことを計画した。やつて見て親方連中は此方からは小言を言はれるし下の者はやつて居るわで転手古舞をしてしまつた。十六日に、丁度此方で政治犯人を釈放した、あれと同じに「政治犯人は出してしまつた方がよいだらう、そしてこれを握つてやつた方がいゝぢやないか」といふやうな意見があつた、そして監獄の政治犯人だけは出した。さうすると今度は残つて居る強盗殺人といふやうな厄介者が騒ぎ出した、彼等一部の者を出して我等を出さないといふのは何事かといふので大分騒いださうである。それは十六日の晩であつた。ところが十六日は昼頃から、ソ連が午

後一時の汽車で京城へ到着する、万歳々々で共産主義をやつて居る若い連中が迎ひに行く、それから一方に於ては独立になつたことを祝はうといふ連中がある、これは猫も杓子も出て来いで旧韓国旗を立てて街をデモをやつた、そこへ共産党が今からソ連を迎ひに行くといふことで停車場へ集つて行く、そこへそれを見る物見高い連中が集つて市中をデモをやつた。これは取締らなければならぬ、ところが警察官が皆居なくなつた。今迄総督府を笠に着て威張つて居つたのが皆独立派の方へ今度は俺等が治安を護るからといふことで行つてしまつた、内地人の警察官は自分等の身が危いから家族の纏めに行つてしまつた。そこで十六日と十七日は京城の交番には巡査は一人も居らぬ、その中をデモをやる、やり放題である。軍隊は今迄はさういふ方面には関係して居らなかつた。ところが軍隊は、「これはいかぬ、一つ兵を出さうか」と言つた。私の方では十七日に直ぐ公文で「軍隊に兵を出さう」といふことを言つた。ところが警察の者は「軍隊の手を借りることは估券に係はる」と思ふ。併し軍隊の方は「治安に危険があれば自ら出兵する権利がある。これは総督府が治安が危くなつたと見れば直ぐ公文を出さなければいかぬ、それで公文を出せ」といふことでやつた。それが十七日であつた。その前後共産党員の一団が監獄に行つて門を破り、内の監房に居る囚人は破つて外へ出ようとして居るから、刑務所の役人共は震へ上つてしまつた。「どういたしませうか」と言つて上司に聴いた、上司の方でも「さうなつてしまへば五十歩百歩で致し方がないから開けろ」と言つてやつた。私は翌日聴いて怒つて、「一名でも二名でも引張つて来い」と言つて、仕方がないから開けると言つた者は処置したが、十七日から軍隊が配置に就いた。併しながら京城には殆ど軍隊が居らなかつた、皆南方の海岸の方の防備に行つてしまつて極く僅かしか居なかつた、菰田君が師団長であつた。一大隊居るか居らぬであつたらう。それが配置に就いて、それから市中のデモはなくなつたが、今度は寄ると触ると方々泥棒、掠奪が始つた。日本の『毎日新聞』か何かには総督が司法権と警察権を委譲したと書いてあつたが、これは全然ない。さういふデモとか何とかいふのには総監が手厳しく向ふに抗議をし、それから総監があゝの時に放送した。

併し終戦にはなつたが、一体朝鮮はどうなるのかちつとも判らぬ、ただグン／＼北からソ連が入つて来る、そして咸鏡北道の知事など何処へ行つたか判らぬ、これは戦さだから住民を連れて山の方へ避難してしまつた。それから羅南の師団も居なくなつた。やがては咸興に飛込んで来て咸興の知事を拉致してしまつたり、その一部は平壤に飛込んで来た、斯ういふわけで、向ふが入つて来る度毎に軍使をやるが要領を得ないこと夥しい。それから向ふの言ふことが朝と晩で違ふ。例へば咸興の如きは二十二日に咸興へ行つて来て向ふの大將や幕僚と此方の知事との話では、「行政はお前が従来通りやれ、会社の仕事も動かさぬやうにやれ」と言ふ、ところが夕方になると、今朝の話は違ふ、「お前達は元山へ抑留する、此処へは執行委員を設置する」と言ふ。さう



いふ筆法で到る処やつてしまった。だから八月中は渾沌たるものであった。

#### 4、政府の総督府に対する態度

政府はポツダム宣言について向ふへいろ／＼な話をして居つたであらうが、さういふ情勢にあるといふことも一言も言つて来ない。それからラジオで十五日の正午に御言葉があるといふことも同盟通信で知つた、だから政府は御言葉があるから皆に聴かせろといふことも何も言つて来ない、それから後の事も何も言つて来ない。阿部総督の方からは時々刻々の事を皆言つてやつた。それから用件が無しに拘らず午後八時には内務省に電報せいといふ位にして居つた、併し向ふからは何も言つて来ない。斯ういふことを一遍訊いてやつた、「向ふが愈々飛込んで来て接收するといふ時には政務総監その他の者はどうするか」と言つてやつた。ところがそれに対して、「状況の許す限り善処して貰ひたい」と言つて来た。そこで、あまり癪に障るから、「状況が許す限りは言はずともやるのだ、その状況が許されなくなつた時にどうするか」と再び問うてやつたが、何も言つて来ない。その後「米軍が入つて来たかどうか、総てのものを譲渡するか」といふことを問うてやつたが、何も言つて来ない。それで九月二日のマッカーサーのあれで初めて知つたのである。政府は自分自身が朝鮮に対しては凍結してしまつたのである。さうして置いて「米軍が沖縄を出た様だ。軍艦がうろつく様だ」といふから、皆「何を持つて行け、書類を焼け」と言うて居つた。そして今になつてそれは怪しからぬと言ふが、怪しからぬのぢやない、何も一つのヒントを与へられて居らないのだから。普通ならば状況は斯様々々になつた、お前は斯う／＼せいといふヒントを与へられなければならぬ。三十八度以南と以北についても政府は何とも言つて来ない。政府からは何にも言つて来ないで、沖縄に居る米軍から朝鮮を占領するといふ電報が軍司令官宛に来た。そして向ふから細かくいろ／＼な註文を言つて来た、仁川に行くから掃海をするやうにと言ふ。それで初めて、それぢやさうなんだなアといふことであつた。三十八度といふ事についても、内務省の管理局長からであつたか極く後になつて「南の方に人を集めろ」と言つて来た。八月の末になつて米軍が入つて来る、初めは釜山へ入つて来るのか木浦に来るのかちつとも判らなかつた。ただ向ふの沖縄からの通信に依つて仁川あたりに来ることは判つて、それから仁川を四日迄か五日迄に彼処に機雷があるだらうから之を除けること、艦が入港出来るやうに準備して置くこと、出迎ひの案内船をよこすことといふ註文が来て、九月五日に先発の者が来た。それが京城に入つて来て大体の見当が付いて、六日か七日に仁川に向ふの軍司令官が入港するといふことであつたが、それも一寸遅れて八日に入港して京城に入つて、九日に朝鮮に関する降伏文書に調印をするといふことになつて、それには向ふの陸軍の指揮官と海軍の指揮官、此方は軍司令官と海軍の指揮官と総督とを招んで総督府の会議室で降伏文書に調印

したのである。

##### 5、降伏文書調印式と総督

九月九日に病氣して居る最中に調印しなければならぬのでその日は参つた、朝起きたら病氣が起つて居る、直ぐお医者さんといふので、京大の院長が直ぐ飛んで来てくれて注射をして、午後三時には向ふが迎ひに来るといふ、二時半迄寝て居つて治つて大丈夫だからといふので下へ降りて行つて応接間へ行つたらグツと吐いて、一遍吐けば宜からうと思つて出掛けて行つたところが、途中の自動車の内で数回吐いた、併し古田秘書官が氣を利かして新聞紙を沢山持つて来て居つたからそれに吐いて、向ふに行つて休んで居つたら又吐いて、四時からサインをして二枚目を書いて居る時にハツとやつたがハンカチで受けて、甚だ醜態であつたがどうにも仕様がなない。向ふは大変丁寧にはして居つた。九日調印をして、十日に体の工合が好かつたら会ひたいと言ふので総督府に一寸出た。その時分にはもう総督室は米軍が占領して居る「阿部総督のことは承知して居るから十分の敬意を持つて居るけれども、併し公務的の事については氣に入らぬ事も要求しなければならぬ場合も出て来る、例へば官舎を明けてくれといふことになるかも知れぬ、私達は何処でもよいけれども、併し形の上でさうしなければならぬ」といふことで、「それも要求することがあるかも知れぬから宜しく」といふ挨拶であつた。総督は「何時でもよいやうに用意して居るのだが、ただ家内が病氣で寝て居るから、動かし得るやうになれば何時でも明けるから」といふことに返事をして置いた。十二日に更に会ひたいといふことで会つたところが、「総督の職を去つて帰国して貰ひたい」といふ話であつた。「旅行は安全に且つ出来るだけ愉快にされるやうに手配をする、飛行機で行くとも船で行くともどちらでも御随意に」といふことであつた。その時も、「病人が治り次第発つ、五、六日はまだ無理だらうと思ふから」といふことで、そんなことで別れて、十八日に発つつもりであつたが、十八日は荷物の検査とか何とかで遅れて、翌十九日に発つて来たのである。

(以上)